556-243
1200501510962
556
複写

25 8. 28

12771
乙

お經抄語

安藤照道
小久江成子稿

普明照
世間

明照夫人清囑

總持石禪

大本山總持寺管主新井石禪老師より安藤照子に贈られたもの

觀音像（安藤照子筆）

春日は法師の藥にたゝ法師茶
賀ふ銘く過ぎ去りし大慈菴に
来給せられた日かるゝを別れし後
ゝ打ちとゝ交法の眺しなく生し法
其後まゝ与ち藥められし食味法
味くさく法ゝ法れ日法布法法
四回法方参尚は参味いふし居

大朝し物語は如しく閲法し法法
尼法生し実歴は稀なる法法法
来八法ふ法法法も法法法法法
一要せる人生し釈の徹底まる法き元
るへく幾法の苦闘法法法法法法
語法一大活動映画法法法法法
あ法法法法法法法法法法法法
顔せられ法は釈尊法法法法法
も思はるゝならへ油断は法康を捜し

呼吸困ん病苦日夕方きさらず
闘病日四月もまし居
久しきまの法筆法法文法釈
評結構法法法法法法法法法
感しの参法一度法法法法法

法法法中法法釈尊法法古法法法法法

翰書るたれら贈に子照藤安尼禪照明き就に「語物鯉お」りよ師禪石井新

顔せられたは「頌」を如用
も思はるゝならん油断は康を損じ
呼吸困ん病苦日夕方をさらす
闘病日四月もを経し庵
ハ久しきまの法華文殊経
経摂論み書て傳くを紹ふ
感しの今清一庵は法はを留言
の被に神力の頌を古縁あり出光
被を通ふ因縁奉遇ふ思議
思はれ普明照世間の慈光後
雲の輝き慈照祝六里の願かは
重窮の迷屋せらるゝ為に而後

昭和二年四月下

石

安藤照子

國立國會圖書館

「翰書るたれら贈に子照藤安尼禪照明き就に」

安藤照子近影

556-243

柳はみどり花は紅のいろ〳〵、悟りも迷ひもうき草の葉末に結ぶ露の命、生ある間のよしあしごと儚き世とは觀じながら、それは餘りに數奇な運命を持つたお鯉の一生でありました、お鯉といふのは、私、安藤てるといふ私のすべてを覆うて、世間にさま〴〵の交渉をもつたものなのでございます。

私どもは世間と申す舞臺に立つて始終悲劇やら喜劇やらを演じてゐるのだそうです。私は安藤てるに返つて、お鯉といふ役者が芝居をして來た四十年の生涯をふり返つた時に、もとよりそれが脚色された筋書を演じたのでなく、何れも眞劍の活劇であつたゝめ、靜かにその美醜さま〴〵の繪卷物を繰るやうな思ひ出に耽ける時、どうしてもそれが己れの經て來た生涯であつたやうには思はれないのであります。

無情迅速有爲轉變の世の中と一概に片づけてしまふことの出來ない足跡を殘して來たことに驚きもし、またそれが自分自身の演じて來た事實であることに思ひいたつた時、我ながら淺ましくも思ふのでございます。

今日までに文章にたづさはる幾人かの方々から、私の生涯にあつた物語を公にするやうにたび〳〵勸められました、然し私は徒らに文章の綾に綴られたり、情實に包まれたりすることを好みませんでした。私は人間の一人として、澤山笑つて泣いたお鯉の生涯を終つて、安藤てるといふ少しの拘束もない境涯に入つた今日、始めて眞實の尊いことを悟りました、ほんとうに眞實ほど尊いものはございませぬ、そしてこれからの若干かの餘生は、僞り飾ることなく虛心平氣に終りたいと願つてをります。幸ひにこうした境遇に入つた私は、自らすべてを正直に語り得ることを信じます。

そしてこの物語を通じて、平素餘り覗ひ知ることのできない階級の方々の生活の半面をまともに御覽下さいましたら、たゞに興味が深いばかりではなからうと烏滸がましながら存じます。

かうした考へから始めたこの物語でありますからすべてが赤裸々であります。從つて中に窺はれます現代の知名な方々は御記憶が新たになつてお笑ひになるやら、又成るべくはそのまゝに葬り去りたかつた過去のさま〴〵が如實にむしかへされて、御迷惑に感じられる方々もありましよう。しかし蒔た種は何れも刈りとらねばならぬもの、懺悔によつて諸惡業滅すると申します。何事も僞りでない限りはおあきらめを願ふよりほかはありませぬ。

なほこの物語りは私の實家を相續しております妹小久江成子に、私が口述して執筆させたものであります。それは少しも事實をあやまらぬやうに責任を感じますのと、私の口授だけではお讀みにくいことゝ存じまして順序を立て起稿させたものでありますから、物語の內容は少しも潤色されたものでなくすべてが事實であることを改めて申添へるのであります。

人の死する時そのいふことや善しとか、たゞに運命が數奇であつたのみのお鯉の經歷には、何等誇るべき功績をもちませぬ。その生涯を終つた時、自ら眞の告白をなし得たことを、ある意味において聊かの誇りとし、また自らの慰藉といたしたいために、繰り言ながらひと言申添へた次第でございます。

昭和二年五月十五日

大井町閑居清澄庵にて

安藤照子

目次

一　新橋から雛妓の披露目……一
二　生れは爭へぬ傾國の麗質……五
三　漆御用達も忽ち沒落……九
四　粹が身を喰ふ引手茶屋……一三
五　「彌生」に芽ぐむ蕾……一七
六　鼻の圓遊の踊り對手……二一
七　八百藏に酷似の巡査……二五
八　初めて知る涙の味……二九
九　常盤家から嫁の交渉……三三
一〇　最初の理想は學校の先生……三六

一一　少女尙知る居候の恨……四〇
一二　藝妓になつて詫證文……四四
一三　お鯉の名が登龍門……四八
一四　日清戰爭と新橋の勃興……五三
一五　滄浪閣雨夜の品定め……五五
一六　永井素岳筆の鯉の手紙……五九
一七　金春に照近江の神燈……六三
一八　辛いかな旦那商賣……六七
一九　道樂で無代の料理屋……七一
二〇　座敷は十時限りの事……七四
二一　山縣元帥と馴染の女髮結……七八
二二　梅幸と夫婦約束の藝妓……八一
二三　小文を嫌ふ無心中……八六

二四　五代目菊五郎の妻と妾……八九
二五　澤村源之助の三角關係……九三
二六　年齒を返せと無理な註文……九六
二七　天下の糸平に好い息子……一〇〇
二八　三共の御大若氣の過失……一〇三
二九　洗ひ髮のお妻が詫證文……一〇九
三〇　團十郎の娘を斷はる意氣……一一一
三一　藝妓の旦那は損な役廻り……一一五
三二　鰻の中串で末期の酒……一一九
三三　婚禮の御料理三人前……一二三
三四　市村家橘の嫁御寮……一二六
三五　水垢離斷食の苦行……一三〇
三六　横濱の宿に悲しい想ひ出……一三四

三七　憐れ伊東家小文……一三九
三八　小文を棄て柳橋に仇花……一四三
三九　橋本國手が悲しい宣告……一四七
四〇　散り行く名花一輪……一五一
四一　有繋は五代目菊五郎……一五五
四二　小文梅幸最後の握手……一五九
四三　美人果して薄命……一六三
四四　五代目尾上菊五郎……一六七
四五　鷄の肉が二度の勤め……一七一
四六　兩優並び立たぬ團菊……一七五
四七　貴婦人の俳優買ひ……一七九
四八　知らぬは女房許り也……一八三
四九　蛇喰ふ雉子の一言……一八七

五〇　待合に巣喰ふ痴蝶狂蜂……一九一
五一　築地橋の畔に佇む人影……一九五
五二　最後處は築地川……二〇〇
五三　戀の二十六夜待……二〇四
五四　藪から棒に別れ話……二一〇
五五　辻褄の合はぬ男の辯明……二一三
五六　柄に無い亭主の權利論……二一八
五七　立つ鳥跡を濁さぬ帳面……二二二
五八　恥を曝した戀愛病患者……二二六
五九　駄目になつた苦肉の計略……二三一
六〇　落花再び梢に返らず……二三六
六一　荒岩と大砲の憤慨……二四〇
六二　新橋村へ返り咲……二四四

六三　日露の風雲漸く急……二四八
六四　麗人梅三升梅香……二五一
六五　天晴なり俠妓の發奮……二五六
六六　分捕船の中で意外な再會……二六〇
六七　浮世三分五厘の生活……二六五
六八　一幅對の女猩々……二六八
六九　綺羅を飾る後援者……二七二
七〇　藝妓を苛める亂暴客……二七七
七一　羽織の裏に文晁の繪……二八二
七二　高田實を見損ふ……二八七
七三　巧と失策る反り討……二九二
七四　蝦夷が島根へ人身御供……二九六
七五　喜樂老女將戀の想ひ出……三〇〇

七六　臍の梅干は船暈の禁忌……三〇四
七七　罪なくて見る函館の月……三〇九
七八　湯の川溫泉の仇夢……三一四
七九　色卽是空と生正覺……三一八
八〇　お說法は枯木寒巖……三二八
八一　戲謔から出る馬大盡の艶福……三三四
八二　黑鳩將軍の御接待……三三四
八三　藝妓に帶の無心は無理……三三八
八四　紅葉山人のお座敷……三四三
八五　一夜仕込の點前……三四七
八六　常陸山と荒岩の達引……三五一
八七　相撲の懸賞に藝妓……三五六
八八　乾坤一擲の大勝負……三六〇

八九　宛如の凱旋將軍……三六五
九〇　相撲を夫に持てば……三六九
九一　兒玉大將を玄關拂ひ……三七三
九二　お土産は銘仙の前掛……三七七
九三　參謀本部へ鷄肉とおでん……三八一
九四　橋渡しは山縣老公……三八六
九五　巨頭公の直接談判……三八九
九六　藤棚の下に戀を語る……三九二
九七　參謀長の交替……三九六
九八　勇ましい軍の門出……四〇一
九九　音に聞えた大雷……四〇六
一〇〇　運が惡かつた六代目幸坊……四一一
一〇一　瓢家へ買切りのお座敷……四一三
一〇二　飛んだ濡れ衣……四一八
一〇三　江戸ッ子藝妓の意氣……四二四
一〇四　弱きを助くる棄身の戀……四二八
一〇五　身受けの相談……四三二
一〇六　荒岩が感慨多き想出……四三八
一〇七　巳代治伯を調伏の祕策……四四一
一〇八　取卷が主人を追使ふ……四四六
一〇九　一代の才人も藝妓に敵はぬ……四五〇
一一〇　血腥い記念物……四五四
一一一　斯道にも大元老の春畝公……四五九
一一二　伊藤公に藝妓から悋氣……四六三
一一三　腕捲りで春畝公を凹す藝妓……四七〇
一一四　名物「桂鯉」の茶碗……

一一五　深夜に門を敲く……四七五
一一六　兩公手を取て泣く……四七九
一一七　媾和記念燒穴の蚊帳……四八三
一一八　日比谷燒打事件の發端……四八七
一一九　全市街が修羅の巷……四九〇
一二〇　官邸の非常口から……四九二
一二一　別れの杯は白葡萄酒……四九八
一二二　薄化粧に死裝束……五〇二
一二三　危く助かる隣家の唐黍畑……五〇七
一二四　置き所なき身一つ……五一〇
一二五　町内から立退の嚴談……五一四
一二六　行衞定めぬお鯉の移轉……五一七
一二七　日のめを見ずに暮した十八日間……五二〇

一二八　身を退いてくれ……五二四
一二九　お鯉より桂公へ……五三〇
一三〇　桂公よりお鯉へ……五三三

お鯉物語

（一）新橋から雛妓の披露目

――兩輩はぽん太、おそめ、おゑんの美人揃ひ

お鯉は十四の年齡の夏、初めて新橋の近江屋から、雛妓の披露目をした、時は日清戰爭の前の歲、明治二十六年の六月であつた。

お披露目の時には、紺の透綾に、その名に因む鯉の瀧上りの模樣を染めたものを着せられた。今こそ新橋と云へば、東京第一の花柳界で、その名は外國の浮れ男の間にまで響いて居るが、その頃までは、未だ柳橋、日本橋が全盛で、新橋はこれに一目を置て居た形ち、藝妓は裾模樣を着ず、着替も小紋の無垢は着られず、縹色の裾で、黑繻子の襟附と云ふ貧弱さであつた。

雛妓は友禪が出の衣裳で、着替はお召と定つて居た。

當時お鯉の雛妓仲間には、後に鹿嶋清兵衞の許に嫁して、初めは艶名を一世に謠はれ、後には天晴れ貞女の龜鑑と賞へられたぽん太が居た。その清兵衞に寫眞を撮られて、新橋に此の美

人ありと評判されたおゑんが居た、高田愼藏氏が其頃には珍らしい洋裝をさせて連れて歩いたおそめ、平岡大盡の寵妓となつたおきん等、永く後の世までも其名を殘す美人が、百花繚亂として新橋の巷に咲き揃つた風情は、大したものであつた。

姐さん株の方には、おやま、おいろ、幸吉、喜代次などが腕を揃へ、いなせな處では廣袖のねんねこ袢纏を引懸けて、お湯の往き返りに町内の若衆の肩を摑まへて

『オイ、新橋生へ拔の姐さんを知らないのか』と怒鳴り

『なんで挨拶をして通らないのだえ』

と啖呵を切る俠妓小竹などが居た。

向ふ河岸の烏森には、おいくと云ふ豪妓が居た、其頃もう五十幾歳の大姐えさんであつたが、若い妓輩などは、その名を聞てさへ縮み上る位であつた、よくお座敷に行くと、小さい同士が

『おいく姐さん居るの』

『あゝ、居るわ』

と聞くと、思はず襟を正したものである。

此のおいくは大阪の三味線彈きの團平の女房で、烏森に春本と云ふ藝妓屋を出して全盛を極め、抱妓も大勢置いて良い藝妓を育て上げたが、是れが赤坂の春本の前身である、よく伊藤公や其他の立派なお座敷で、若い妓が席に侍べる時

『此の妓は怜悧なんですよ』

と、おいく姐さんに折紙を附けられゝば、倏忽ち出世の端緒になる、若し亦反對に

『ほんとに好かない妓だよ、生意氣だネ、藝妓になんかなれやしないよ』

と、極め附けられゝば、もう兎ても駄目、恐ろしい御威光のあつたものである。

お座敷の勤め方は、姐さん達は盛んに三味線を彈いた、間には罪の無いおしやべりを澤山して、賑かにお客を遊ばせるのが商賣と心得て居た、雛妓は姐さんが彈けば踊る、お酌をする、お銚子の代り目を氣を附けて運ぶ、姐さんが三味線が入用だと思ふ時分に、持て來る、お客がえへんといへば吐月峰がいると、また直ぐに立つ、斯うした事が雛妓の勤めで、其氣の利くと、利かないとに依て、馬鹿となり怜悧と云はれるのである。

數あるお客の中には、此の雛妓ばかりを集めて、興に入つて居られる人があつた、當時全盛

を極めて居られた伊藤公も、よく雛妓を可愛がられ、お鯉も始終御贔負になつたものであるが浅野總一郎翁がまた大變に雛妓が好きで、色々の噂さのあつた事は人の知つて居る通り、北里柴三郎博士も亦其中の一人で、常に雛妓を呼び集めては獨りで悦に入て御座る、何の事か善く解らなかつたが、子供心にも只何となく厭な心地がして、其お座敷へ出るのが怖ろしかつた。

人は土地の庇蔭で榮へ、土地は人の力で發展する、斯樣なお客やら、藝妓やらが、持ちつ持たれつ、遊んだり騒いだりして居る間に、新橋の花柳界は漸く隆盛を見るに至つて、何時の間にか、昨日まで先輩と崇めて居た他土地を凌いで、全盛比類なき處となつた。

お鯉は恰度其潮先に乘つたのである、彼女が波瀾洶湧、數奇を極めた奇拔な經歷は、此に華やかなるスタートを切るのである。

(二) 生れは爭へぬ傾國の麗質

——御本丸のお部屋樣の孫に當る娘

お鯉が新橋の藝妓に現はれて、倏忽ち上流縉紳の間に知られ、其艶色と、俠氣と、機智と、技藝とに於て、他に肩を並ぶる妓も尠い樣になり、賴まれて市村家橘——現の羽左衛門——の妻となり、次で此を去て再び神燈を金春新道に掲げ、秋月春風等閑に過す事幾年、或時は怪力士荒岩の情人となつて、强て其妻にと望まれたが、己れが矢張り野に置かるべきものなる事を知つて之を斷はり、終に巨頭宰相桂公爵に知られて、其庭中に移し植ゑられ、一時寵を專らにして花柳界羨望の的となり、日露戰爭後の燒打騒動の際には、其身一つをさへ置くに處なく、萬死の中に處して尙公が知己の恩を忘れず、奉侍十年の久しきに涉る迄、其半生の活歷史は實に明治大正に跨がる社會の裏面史とも云ふべく、花柳演藝界の祕消息とも名づくべきもの、之を傳ふる事は決してお鯉一個人の爲めのみでない、笑謔の間、又世を益し人を利する事の多き

を疑はない、以下順を追ひ、回を重ねて其面白き經歷を書いて行かうとするに當り、順序として先づ彼女が生立から始める。

諺に『瓜の蔓に茄子はならぬ』と云ふ、難かしく云へば『將門將を出す』と云ふ事である。お鯉ほどの人間は、猶且り何處か平凡でない家から生れ出るものである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

お鯉は本名を照と云ひ、明治十三年十二月八日、東京は四谷見附外、今有名な牛肉店三河屋の在るあの一角の家屋敷を有つて居た諸侯御用達の漆問屋、松屋次郎兵衞の家に生れた。

此の松屋と云ふ漆問屋は、實に四谷の草分けで、連綿十二代も續いて居る名家である、將軍家お鷹狩の途中、此家へ御休息になつた事もあり、其時用ゐた葵の御紋の附いた幔幕などもある。大岡越前守の時代、名字帶刀御免となり、姓を小久江と名告つた、家柄も良く、資產も相當に貯はへて、先づあの附近での名望家であつたのである。

お鯉の祖母と云ふのは、其頃幕府大奥へ上り、お部屋樣となつて居たのだが、緣あつて小久江家十一代の主人次郎兵衞の妻となつた、其嫁入の時乘つて來た駕籠が素晴らしい金紋附のもの

で、久しく家寶の一つとして保存され、お鯉も子供の時分此話を聞かされて何となく有り難く尊とい物の樣に思つて、土藏の二階に吊してあつた其駕籠のことを考へる時、自分の家柄に就て一種の誇りを感じた、其自慢の駕籠も間もなく一家沒落の際、二束三文の公賣に附せられて了つた、これはお鯉が今日まで悲しく情けなく感じて居る思ひ出話しの一つである。

お鯉の實母のおふくと云ふのは、小久江家十二代の總領娘であるが、實父の伊藤鐵次と云ふのは、小久江家の人でない、實は母のおふくが若氣の至り、親の許しを得ず勝手に決めた情人で、內緣の夫婦ではあつたが、籍は入つて居らぬ爲め、お鯉は兩親揃つた間の嫡子と云ふ譯に行かず、日蔭者として戸籍面に記入される悲しい運命の下に置かれた、這樣事も猶且り後年のお鯉の身分を操つる一つの原因であつたかも知れぬ。

お鯉は自分の身の上話しをする毎に、よく笑つて次の如く語る。

『私は實は私生兒だつたのです、親々が粹な仲で、親の定めた結婚をしないで、勝手な所爲をして私が生れたので、遂々家が潰れて了つたのですからね。』

お鯉の一番の知己であり、お鯉が一生の中最も傾倒し、尊崇し、愛着した人であつた桂公が、

明治十三年お鯉の生れに時、恁様位地に居たかと云ふ事は讀者の爲めに興味ある事であらう。

桂公は弘化四年の生れであるから、明治十三年には數へ歳の三十四で、官は陸軍中佐であつた、その三月には太政官の權大書記官に兼任し、軍事部勤務を命ぜられた、五月二十六日には勳四等に叙せられ、六、七月の頃には時の參謀本部長山縣大將に隨つて福知山や敦賀の方に派遣せられ、又陸軍演習の審判官陪從を仰付けられた、十二月に入つて參謀本部管西局長心得を命ぜられた、兎に角陸軍部内最要部の地位を占めて居られたのである、家庭では其歳の五月二十七日に、長女の蝶子が生れた。

此の如く、年齢から云へば、桂公とお鯉とは、恰度親子ほどの差がある、公が後年お鯉を知て娘の如くに愛し、お鯉も亦公を實の親の如くに馴れ親んだのも、無理ならぬ事と思ふ、但し此兩人が相知り、相接するに至る迄には、頗る長い經路がある。

(三) 漆御用達も忽ち沒落

——桂公と四谷の三河屋の牛肉

美人を形容して傾國と云ふのは、昔時からの言葉である、お鯉ほどの名妓が、城を傾け國を傾けるのは、敢て不思議も無さうだが、彼女は其手腕や容色に依るに非ず、生れ出た許りに已に其家を覆へした、イナ、お鯉の生れたのが卽ち小久江家沒落の原因となつた、其事情は斯うである。

お鯉の母のおふくには、男の兄弟が無つた、卽ち何所からか養子を迎へて、其家業を繼がせねばならない譯であつた、殊にこの漆屋松屋次郎兵衛方には、漆の製法に就て、祖先傳來の祕法があつた、而して之は一家の當主以外には妻子にも敎へぬ事になつてゐた、乃でお鯉の祖父に男の子なき爲め、小飼から此家に奉公して居た番頭の源之助を見込んで其祕法を傳へ、之をお鯉の母おふくの養子に迎へて、家を讓る事になつて居た。

善くある例しである、おふくは此番頭が氣に入らない、他に思ふ人が有つた、夫は當時京都の公卿出の若者で、尾張德川侯の家職の養子となり、慶應義塾へ通學の爲め、屋敷へ御出入の緣故から松屋の家へ寄寓して居た伊藤鐵次と云ふ青年で、漆屋の小僧上りとはチト譯が違ふ、之れがお定まりの如くおふくと思ひ思はれる仲になつた、養子の相談などは點で受付けやうともしない、此の結果が如何なるかは、古い淨瑠璃や草双紙などに澤山說明してある。

案の如く、番頭は面白くないので、松屋を飛出して了ふ、幸ひ漆製法の祕傳を授かつて居るから、之れ丈でも立派に飯が喫へる、一方戀に目の眩んで居る男女は、之で厄介拂ひをした了簡、財產はあり、氣樂な身分、之から暢氣に暮して行かうと思つた迄は可いが、根が書生上りで商賣の道は知らず、其中に親類や友達が、寄て集つて色々な仕事を持込む、此が型の如く損許り、果は氣を焦つて株式に手を出す、鑛山事業に取り掛る、結果は火を見るよりも瞭かであつた。

斯の如くにして、十二代に亘る松屋の家は、倏ち家資分散と云ふ事になつた、これはお鯉が僅か四歲の時である、その前の歲のお宮詣りには、有ん限りの贅澤な服裝、仕着せや配り品に

出入中を賑はしたお鯉も、其翌る歲には圖らず執達吏の襲來に遭つて、玩具も衣類も悉く持て行かれるとは、實に分らぬものは人の身の上である。

執達吏の襲來と分つた時、お鯉の兩親は吃驚敗亡、急に數多の雇人を解雇し、今は何の權威をも持たぬ小久江家の實印を、有繋に親代々首と懸替の印形と心得て、胴卷の奥深く藏ひ込んで、お鯉を懷ろに家を棄てゝ逃げ出したとの事である。

その時、執達吏が、數臺の荷車を曳て來て松屋の家財道具を運んで行つた後に、最後に念の爲めと穴倉へ入つて調べた處が、圖らずも小久江家の先祖が封印して藏して置いた小判許り入つた金瓶數個を發見した、之が一つでも在る事が知れて居れば、其時の借金位何にでも始末の附く筈であつたのを、知らずに奪られる方も呆れた迂濶漢であるが、默つて携つて行く者も不都合千萬な話しと、皆なで地鞴を踏んだが、全く後の祭りである。

後年桂公がお鯉とお忍びで三河屋へ牛肉を喰べに行かれた折、三河屋の主人が驚いて飛で來て御挨拶を申上げた、其席上圖らず此話しが出て、公爵も氣の毒に思はれ、『昔しはそんな事も澤山あつたらう、若し小久江の家で此地面を今日まで持て居れば、大した金持になつて居たら

うに、惜い事をしたものだ』と云はれた、若し左様すれば、お鯉も藝妓にならず、桂公と相知る機會などの有り様もない次第である。

後に桂公が小久江家の話しをされた時、お鯉おぬしのためには大切な小久江家を繼る心得で居なければならぬ、それには子供のうち、眞佐子――公の御落胤――を小久江家の相續人にするようにせよと、有り難いお言葉さへあつた。

（四）粋が身を喰ふ引手茶屋

――新宿に眼千兩の評判娘

公卿出の書生上りと、御用達の祕藏娘、此二人で漆問屋の營業が成立つ譯がない。店は倏忽ちに沒落、家、藏、地面から家財、道具まで、悉く債權者の爲に取上げられて了つた。

お鯉の兩親の鐵次とおふく、四谷の住居を追ひ拂はれて牛込は喜久井町の片邊りに、微かな借家を借り、親子三人此に佗住居をする事になつたが、何しろ今迄贅澤な生活が癖になつて居るので、質素な暮しなどは兎ても出來ない、豆腐一つ買ふにも自分では何だか氣まりが惡く、隣りの女房の手を借りると云ふ狀態であるので、永く續く筈がない。

這樣不始末を仕出かしたので、父の鐵次は尾州家の養家先へは立寄る譯に行かず、慶應義塾を半途にして退學の止むなきに至り、他に何の職業をも覺えて居らぬ身の、止むなく傳手を求めて、現の巡査の前身、其頃警邏と呼ばれたものになり、辛ふじて一家三人の口を糊すより致

し方のない身分になつたのは、身から出た錆とは云ひながら、氣の毒千萬の次第である。

母のおふくと云ふのは、舊幕時代の大町人の一人娘で、殊に大奥に御奉公をした祖母に仕込まれた祕藏娘と云ふのだから、兎ても尋常の家庭で一人前の通用をする人間ではない、よくお鯉が母の噂をする度に

『まあ凡てが、御姫様と云ふ型でした』

と云ふ様に出來て居て、所帶の繰り廻しこそ出來ぬが、和歌、俳諧から琴、三味線、茶の湯生花は申すに及ばず、閑々には押繪の姉様を繕つて居やうと云ふ風、亭主の鐵次と好一對の女である。

物心ついてから、その一人娘を養育し兼ねて養女にやつた實母の薄情を恨んで居たお鯉も、後年家を有つてから微祿した實母を引取つて、其日常の生活振を見る様になつて、初めて夫れが餘りに時代と離れ過ぎて居る、暢氣な好人物なるに驚き、成程これでは一人の子供も育て兼ねたのも無理でないと首肯したと云ふ。

お鯉親子三人が、四谷から牛込へ引移つた其歳の暮、世話をする人があつて、お鯉は新宿に

引手茶屋をして居た安藤兼作夫婦の許に養はるゝ事となつた、お鯉が今日安藤の姓を名告るのは、此が爲めである。

養父の兼作と云ふ人は、日本橋馬喰町の質屋の放蕩息子で、御定まりの如くに家にも居られず、壯年の頃から料理が好で、大層其道に巧者であつた處から、迅くから北海道から長崎の邊まで渡り歩き、各地の料理を造る事が自慢であつた、其他にまた、清元が上手で、當時延壽太夫より輕妙な唄ひ振であると云はれた清元菊壽太夫の名取りで、倉太夫と呼ばれた、粹は身を喰ふての引手茶屋、年は五十餘り、凡ゆる道樂を仕上げた、通人であつた。

養母である倉太夫の女房は、江戸ッ子のお人好で、夫婦共に子の無い處から、お鯉を可愛がる事尋常りでない、これ無くば朝夕の食事も甘からずと、愛でられたのはお鯉の爲めに幸福であつた。

貰はれたのが六歳、年齒を重ねる程、天の成せる麗質は益々其美はしさを發揮して、まあ綺麗なお娘、と見る人が賞める、殊に其明眸の人に優れて美しい處から、誰云ふとなく

『眼千兩』

と云ふ折紙を附けられて、男も女も、老も若きも、皆この戀知らぬ少女の一瞥に預らんと競ひ集まるのであつた。

通り掛りの人までが、近寄つて頭髪を撫で擦するに、養父母の得意や想ふべく、お鯉自身も惡い氣はしなかつたが、只、限千兩とは何の事だか分らなかつた。

（五）「彌生」に芽ぐむ蕾

——富貴樓お倉とお鯉との書因緣

富貴樓のお倉の名は、今日尙力强く人の耳の底に響いて居る、彼女が御維新以來、本據を橫濱に構へて京濱の花柳界、演藝社會に絕大の勢力を張り、女將の中の女將、女社會の大元老として、元勳、大臣、大富豪、大實業家を友達扱ひにし、女だてらに珍らしい御威光を揮つた事は、新日本の歷史を飾る一異彩であつたと云へやう。

このお倉が世の中に泳ぎ出した初めが、彼女が最初の情人鐵砲鍛冶の松屋鐵六の爲めに、『一寸風呂へ往つて來るよ』

と、新宿の豐倉屋から勤めに出たのである事は、お倉を知つて居る程の人は皆な知つて居る。お鯉の養父の安藤兼作は、新宿で引手茶屋をして居たのであるから、云ふ迄もなく當時新宿で評判の豪い花魁たる豐倉屋のお職お倉を知つて居る、時代こそ違へ、お鯉も亦、養父母から

其昔しのお倉の噂さ話を聞かされて居る、後年お鯉が或る席でお倉に逢た時、當時若い藝妓などは　容易に傍へも寄り附けない威勢のあつたお倉が、丁寧にお鯉を遇つて

『お鯉ちやん、おまはんのおとつさんの倉さんやおつかさんとあつしとの仲は世話になつたりなられたりの中だつたんだよ、ちよつと、こつちへお出でよ』

と云つて、他の藝妓や女將達を羨ませた事もある。

其麼なる前世の因緣からか、兎角に兩親に福運の無いのを有つたお鯉は、此で亦其養家の沒落を見る情けない目に會つた、兼作夫婦が營つて居た引手茶屋も、營業面白からず、お鯉が七歳の時に人手に渡る事となり、兼作は女房とお鯉を連れて、昔時からの道樂友達である日本橋村松町の袋物屋の息子の岸岡勘兵衛が始めた日本橋濱町の待合、彌生の家へ轉り込み、親子三人相携へて食客となつた。

居候とは云へ、決して只の居候ではない、前にも云ふ通り、兼作は大の料理通で、庖丁を持たしたら一寸類の無い技倆を持つて居るのであるから、當時盛んに賣出して、善い客の澤山來る彌生に取つては、重寶此上なしだ、養母は永年客商賣をして來たのであるから、善く氣が

附きもするし、善く働らく、乃で自然彌生の勝手元は兩人で引受ける事になつて、蔭日向なく働らくので、彌生の主人は二なきものと思つて、兩人を歡待した。

彌生の主人は散々道樂をし盡して來た人だけに、頗る粋な人であつた、頭は坊主に剃つて、始終五分も透かない粋な服裝をして居た、その風格が一寸河内山に品を附けたと言つた樣な人である、通り名を『彌生の坊主』と呼ばれて居た。

女將の百瀨みつは、日本橋の濱吉と云ふ姉さんかぶの藝妓上りで、男勝りの利かぬ氣象、却々豪い女であつた。

お鯉は彌生の夫婦に大變可愛がられて、七歳から十三の歳まで厄介になつた、此家にはおとくと呼ぶ養女がおつた、女將がこの二人の娘に對する教育は嚴格を極めたもので、その感化は終にお鯉の一生を支配したと云はれて居る。

お鯉ととくちやんの兩娘は、其頃彌生のすぐ前にあつた八幡小學校と云ふのへ通つた、學校から歸ると、茶の湯、生花の師匠が來てお稽古である、遊ぶ暇なぞは少しも無い、お行儀の躾け方は最も嚴しく、お八つの菓子を與へられるのにも、白い紙に載せなければ決して喰べては

ならぬと云ふ様に思はせた、夕刻になると、子供はもう寢るものと、嚴に一室に入れて了つた、夕方から遊びに來るお客の姿などは、見せぬやうにしてゐた、あゝ云ふ營業をする社會に却つて斯ういふ嚴格な庭訓がある、今日良家の兒女の放縱な狀態を見るに付けて、お鯉は時折りかうした思ひ出話をする。

濱町の彌生に居る間に、お鯉は學問や行儀作法ばかりではない、熱心に遊藝の稽古をさせられた、舞踊は西川のお古代に、清元は清元お葉に仕込まれた。

清元お葉の名は、大抵の人は知て居やう、今日の延壽太夫があれ丈になつたのは、全くお葉の庇蔭である。

西川お古代は、名人西川扇藏の弟子で、九代目團十郎と合弟子である、散切頭髪で、始終男の風俗をして、清洒とした好い姿の師匠であつた。

其頃可笑しい話しがある。

鼻の圓遊で通つた、例の圓朝の弟子の三遊亭圓遊、之が兩國の井生村のお浚ひに、山姥を踊りたいと云ふので、山姥ばかり一年間稽古する約束で、お古代の處へ弟子入りをした。

（六）鼻の圓遊の踊り對手

―清元延壽太夫の出世譚

さて一年間、毎日の稽古、同じ山姥ばかり繰り返し〳〵習つても、根がステ、コ以外、舞踊の地がある譯ではなし、殊に大きな體格で、ブク〳〵肥滿て居るので、形も附かなければ身體も動かぬ、お古代師匠たうとう考へた、迚ても之では駄目の事故、寧そ二上りの踊る處を拔にして、相手の金太郎を上手な子に踊らした方が面白からう、成程それが良からうと云ふ事になつた。

乃で、金太郎に選ばれたのがお鯉である。

お鯉は或日の稽古の時、師匠のお古代から、

『圓遊師匠を、よく遊ばして上げるのですよ』

と笑ひながら命令られた。

『あの大きな人を、何して遊ばせるのか知らん』

譯が分らないので、不思議に思つて居たが、舞踊が濟んでから、見物の人々から、山姥が金太郎を遊ばせるのではなく、金太郎が山姥を遊ばせて居た、と云はれた、此の評判が高くなつたので、圓遊は始めて舞踊の難かしい事が分り、同時に又、凡百る藝の内でも最も面白いもの

である事が分つて、一人息子の正ちやんと云ふのをお古代の處へ弟子入りをさした。

此の正ちやん其頃もう可なり大きくなつて居たが、手解きに鳥羽繪を習つて、一生懸命に踊つて居た、然し如何にも恰好が惡く、ぶつきら棒であるので、稽古に來る度び、朋輩弟子達に笑はれて居た。

この圓遊の息子の正ちやんが、今日の若柳の家元若柳吉藏である。

其頃、小網町の木綿問屋に山田と云ふ家があつた、二人の娘があつて、姉には清元、妹には舞踊を仕込んだ、幸か不幸か、二人とも頗る質が良く、何所のお浚へ出してもヤイ〳〵云はれるので、親達も有頂天となり、金に飽かして華奢な稽古やら交際をさせた。

姉は清元お葉の一番弟子でお若と云つた、妹は藤間勘右衛門の名取りでおすゞと云つたが、娘自慢の親は、何とでもして喝采と云はれたい許りに、お浚ひの度に總仕着せを出したり、見物の女連には小紋縮緬の揃ひを出したり、其費用が一度に一萬圓を下らなかつたとは大したものである、之では如何な身代でも續く譯のものでない、此の家は夫が爲に遂々身代限りをして了つた、斯樣な例は其頃よくあつた。

その妹娘のおすゞが現在舞踊の女師匠として聞へて居る藤間政彌である、家の沒落する時、既に踊りの名取りではあつたが、年齒の若い爲めに師匠になる事も出來ず、藝が身を助ける不仕合せ、新橋から政彌と名告つて藝妓に現はれた、舞踊に掛けては夫こそ確實な腕前であるので、大きな宴會などには無くてならぬ妓となつて居たが、遂に本職の方で身を立てるに至つた。

姉娘のお若は、清元お葉の丹精の尋常りで無かつたのと、當人の稟質の藝事に適して居たのとに依て、終に立派な腕前となり、お葉の後繼者となつた、現の延壽太夫の妻女がそれである。

（七）八百藏に酷似の巡査

——日光の祭禮に梅忠の舞踊

お鯉が彌生に厄介になつて、直ぐ前の八幡小學校に通つて居る九歳から十一、二の時、一月に一度ぐらゐ、學校の傍の電信柱の蔭から、棒を携つた巡査が、ニコ〳〵しながら現はれて、お鯉を麾いた、何かと思つて行つて見ると

『これは俺が書いたのだから、お前に上げやう、お手本におし』

と云つて、二三枚の清書を出して呉れた、其當時巡査さんと云へば、子供などには何となく怖ろしがられて居た時分であつたが、此の巡査さん許りは、お鯉も恐いと思はなかつた、有繋に爭はれぬものと云ふのであらう。

幼少い時頗る無口であつたお鯉は、此のお手本を呉れる巡査さんに對しても、何とも口を利かなかつたが、二度となり三度となつては、何となく懷かしい樣にも覺えて、その見返り勝に

立ち去つて行く後ろ姿を、凝つと見送る様になり、學校の往復りに、電信柱の蔭が氣になる様になつた。

此の巡査さんの容姿は、後から考へて見ると、恰度今の中車が八百藏時代の俤に宛然であつたやうである。その呉れたお手本には源平藤橘の名字盡しから、消息往來、萬葉假名など綺麗に書いてあつた、其手蹟は却々美事で、善く書いてある、と、當時見た人は皆賞めて居た事を、幼な心にお鯉は覺えてる。

この巡査さんこそ、お鯉の實の父親の伊藤鐵次であつた、然し極く幼い時に分れた限り、一度も逢つた事もなく、誰も教へて呉れる人もなく、當人も何とも夫らしい事を言て呉れなかつたので、お鯉は現在幾度も會ひながら、之が自分の父である事を知らなかつた。

實の母は彌生へ二三度尋ねて來て、安藤の養父母が、之はお前の母親さんであるよと教へて呉れたので、善く覺えて居た、顏の美麗な、容子の柔しい良い人であつた事を微かに知つて居る然し父親の方は一度も尋ねて來た事が無かつた、多分男の意地で、自分の現の境遇を恥ぢて顏を見せなかつたのであらう、然し我子は猶且り可愛く、其無事に育つて行く、樣子が見たいので、時々電信柱の蔭に匿れて居たのであつたらう、憐れにも氣の毒な、濟まない樣な感じがしたとお鯉は其後當年の事を想ひ出しては語つて居る。

お鯉が此巡査さんを實の父親と知つたのは、十三の歲の夏で、然も其父が既に此世の人で無くなつた時である。

恰度日光に大祭があつて、彌生の女將が養女のおとくや、お鯉など、四五人の子供を連れて出掛けた時で、地方は先代の延壽太夫や梅吉などの一行十四、五人の連中であつた。

日光の町では、お祭りで大層な騷ぎ、餘興として東京の娘連の舞踊が、豪い呼物となつて居た、方々に屋臺が掛つて、朝から晩まで踊り拔く、一週間程毎日同じ事を繰り返すのであるから、踊り子などは全然り草臥れて了つた、夜に入ては我慢にも眠くなつて來る、梅忠の道行に、お鯉の忠兵衛ととくちやんの梅川、各自が臺詞や科を演つて居る間はどうにか續くが、可愛い梅川と孫右衛門が舞臺の正面で、愁歎を演つて居る間、小さい忠兵衛は稻叢の陰でグツスリ寢て了ふ、さて忠兵衛の出になると、地を彈いて居る梅吉が、見物に知れない樣に、撥の尻でそら、出だよ〳〵と搖り起すと云ふ狀態。

後年お鯉が藝妓になつてから、梅吉の處へ稽古に行くと、よく梅吉から
『日光で稲叢の陰で寢て了つた時は、いぢらしい程可哀相であつた』
と云はれたものだ、『サア稲村姐さんのお稽古』などと云はれて、知らない雛妓などから、
『姐さんは稲村さんと云ふ名字なの』と聞かれて、吹き出した事もある。
その日光から歸ると、お鯉は悲しい事に遭會した、それは其實父の死である。

（八）初めて知る涙の味

――彌生の女將から養女に所望された

薄倖なりしお鯉の實父伊藤鐵次は、餘り丈夫でもない身體に、巡査の勤務の激しい行動が耐へたと見え、俄かに急性腹膜炎に罹り、紀尾井町の佗住居に、相見る事も儘ならぬ可愛し子の身を思ひ詰めつゝ、僅かに三十四歳を一期として、歸らぬ旅に赴いた。
斯る事のあるべしとは夢にも知らず、只養父母の事など懷かしみながら、日光から歸つて來ると、
『お前の父親さんが、昨日死つたのだよ』
と敎へられて、養父に伴れられて紀尾井町の家へ辿り行いた、然し未だ恁樣人だか知らない父親さんが死んだと聞かされても、夫れ程悲しい事とも思はなかつた。
向ふの家へ着いて、養父から

『サア、お父さんに御會ひなさい』

と云はれて、恐る〳〵棺の中を覗いて見ると、引繰り返る程吃驚した。

その死んだお父さんとは、例も電信柱の蔭から現はれて、自分にお手本を呉れた巡査さんではないか、相好が變ると云つても、あの懐かしい自分を可愛がつて呉れた巡査さんを間違へる筈はない。

さては彼の巡査さんは、自分の眞實のお父さんであつたのか。

ト、氣が附くと同時に、熱い〳〵涙が兩方の眼から湧き出て、止まる處を知らない、人の手前もあるから、ワツと大聲を揚げて泣く譯にも行かないが、悲しい辛い、情けない思ひは湧き出る泉の如くに、腹の中から込み上げて來て、小さい胸も張り裂けるかと思はれる苦しさ、遂には周邊の物も見えず、居ても立ても居られない心地となり、精神も一時ポーツとなつて了つた。

これぞお鯉が、人間として初めて味はふた悲しい涙である、彼女が數奇なる人生の行路は、斯うして始まつたのである。

＊　＊　＊　＊　＊

女の十三は大切な時である、一生の運命は、隨分此頃の年齡で決せられる、お鯉は十三歳にして亦重大な試練に會つた、同時にまた其生涯の方向を決すべき分岐點に立つた、彼女が今日の運命は、全く其時に定まつたとも云へやう。

彌生の小母さんは、相變らずお鯉を可愛がつて呉れた、其教育には極めて意を用ゐ、嚴格過る位の躾けをした。

素より彌生にはおとくと云ふ娘がある、普通から云へば、此家は當然おとくちやんに讓らるべきであるが、此商賣は誰にでも出來ると云ふ譯に行かない、殊に日本橋藝妓の濱吉以來、其太つ腹でまた善く行屆き、藝もあれば働きもあり、彌生の小母さんは男勝りだ、と云はれて來た自分の後繼者には、並大抵な女では出來ない、未だ少さくはあるが、お鯉なら十分見込みがある、聊か無口ではあるが、彌生の店を繁昌させて行く事は屹度出來る、と思つた。

乃でお鯉の養父母の安藤夫婦に向つて、相談を初める。

『何うだらう、照ちやんを私に呉れないか、此家の後を繼がして、生涯幸福な生活をして行

く事が出來る樣にして上げる、お前さん達夫婦の腹次第で、勿論親子の爲に惡い事でもあるまい、どうかかんがへて貰ひたい』

此時、安藤夫婦が若し承知をすれば、お鯉の運命はまた變つて居たに違ひない、すらりと行けば或は彌生の女將になつて居たらう、然しお鯉の養父母は、諾と云はなかつた、彼にはまた違つた考へがあつた、世の中は不思議なものである。

（九）常盤家から嫁の交渉

―義理は辛い板挟み

お鯉は一時身も世もあられぬ程に慨き悲しんだが、イヤ／＼是も致し方がない、皆な人間に具はる運命、何と思つたとて何うなるものでない、そんな事にくよ／＼するより、差し當る自分達の身の上の事を、間違はぬ樣に決めるより外はないと、健氣にも決心した、『早く世の苦を知る者は、天も自から悧發に生む』と、紅葉山人は言つた、裕かに育つた娘等の思ひも及ばぬ事であらう。

彌生の夫婦から、養女に貰ひ受けたいと、養父母に相談を受けたのも、恰度其頃である、此問題がまた如何なる事かと、お鯉は獨り小さい胸を痛めた。

安藤夫婦の考へは亦頗る違つて居た、殊に養父の兼作の如き、引手茶屋の主人から、道樂で店を閉つて了つた程の男だから、當時上流社會の紳士達の贔負を受けて、繁昌を續けて居る彌

生の店が、將來自分の娘のものになると云ふ相談なら、二つ返事で承知しさうなものであるのに、左樣でなかつた、道樂者の上りは却て堅氣より頑固なものと見えて、此親父もう左樣いふ浮いた營業は懲々、自分は今更仕方もないが、切て可愛い〻娘だけはズツと堅氣な生活をさせたい、立派に成人した曉には、眞面目な職業を有つ者に配はせて、堅氣の人妻にしたいと祈つて居たのである。

然るに此に亦一つの難問題が起つて來た、それは彌生の直ぐ向ふの有名な割烹店、常盤家から養女に貰ひ度い、そして行々は息子の嫁にしたいと云ふ話しが初まつた。

常盤家は其時分から、押しも押されもせぬ立派な老舗である、此の主人と云ふのは永井侯の御家老を勤めた人で、料理屋こそすれ却々の見識を具へた人である、その主人は眼鏡を掛けて、終日臺所に頑張つて、板前や女中達の働き振を監督して居る、女中は凡て木綿の衣服で、派手な風などは爲せない、如何にも氣の塞まる樣な家であつた。

今日でも骨董屋で名高い山澄は、其頃常盤家の隣に居た、お鯉はこの山澄の娘とは殊に親しい學校朋輩で、兩人手を引かれては、よく常盤家へ遊びに行つて、可愛がられて居た。

常盤家の主人は、毎日お鯉を見るに附け、此娘なら家の息子の嫁にして、此營業を繼がせて行くのに誠に申分がない、兩親はあ〻云ふ身分になつて居るし、決して否やもあるまい、善は急げ、他へ決まらない中に、相談を始めて置かうと決心した。

乃で早速養父の兼作を呼んで、

『さて倉さん、如何いふものだらう』

との相談、兼作は清元の方で藝名を倉太夫と云て居たので、朋友同士の間では、何時でも此の『倉さん』で通つて居る。

常盤家の主人は諄々としてお鯉を嫁に貰ひ度い理由を語り、それがお鯉の爲であり、また倉さん夫婦の爲である旨を說いた。

『倉さん』の心は大に動いた、全く其通りだ、客商賣ではあるが堅氣とちがわぬ立派な嚴格なる家風といゝ主人は武士氣質、殊に庄さんと云ふ儼乎とした息子があつて、娘の身を決めるにも一番安心だ、之は常盤家の云ふ事を諾くに限ると思つた、女房も之に異論は無い。

然るに、此話しは『倉さん』の思ふ通りにならなかつた、それにも亦止むを得ない理由がある。

（一〇）最初の理想は學校の先生

――七圓で親子三人の生活

彌生の養女か、常盤家の嫁か、安藤夫婦が左思右慮思ひ惱んで居る時、肝腎な當の本人、お鯉の腹の中には、全然違つた分別があつた、それは斯うである。

其頃お鯉の通つて居た八幡小學校は、常時まだ寺小屋同樣の狀態で、校長は永井侯の御祐筆をしたと云ふ老人、白髯長く垂れた漢學者で、傍ら狩野派の繪が上手で、お鯉等の試驗が善く出來た時の御褒美には、よく校長先生御自身の筆に成る繪を呉れたものだ、お鯉も其繪を貰ふのを樂しみにして居たので、何時の間にか自分も繪が好になつた、其後繪筆に親しむ樣になつたのも、全く當時の校長先生の感化である。

校長の奥樣は、御新造樣と呼び、品の好い由緒あり氣の人で、二人の娘があつたが、長女には養子を迎へ、次女は學校に出て生徒を敎へて居た、其御面相がおかめに似て居るので、誰云

ふとなくおかめ先生と云ふ名で通つて居た、此の親子二人が此學校の先生の全部である。

然し、お鯉は此の學校へ行く事を喜んだ、嚴しく習はせられる遊藝の方は、眞のお役目同樣、些しの感興もなく稽古をして居たのであるが、學校の方は心から面白く、日曜のお休みが寧ろ恨めしい位であつた。

學問さへ立派に出來れば、女だつて世の中を渡れない事はない位ゐの考へが、微かに胸の奥底に萠へ初めて居た。

圖らず實父の死に會つて、漸く大人びた考へが起り初めると、今まで餘り氣の附かなかつた、周圍の色々な話しが耳に附く、中にも自分が無二の友達である彌生のとくちやんが、時々蔭で厭な事を言ふのが氣になる。

『なんだ、居候の癖に』

こんな言葉の意味が、今では犇々と胸に響く、あゝ居候などをして居たくない、自分で自分達の生活をやつて行きたい、そして自分の親を養ふ、人から馬鹿にされず、尊敬されて行きたい、あゝそれ〳〵、それは學校の先生になるのが一番善い道だと、子供心にも考へ附いた。

乃で或日、恐る〳〵校長先生の處へ行つて、相談した。

一體學校の先生になれば、親子三人一家を構へて、生活して行けるものでしやうか、どうでしやう。

十三の小娘にしては、如何にも熟せた質問、然し其樣子が如何にも眞面目で、眞劍さが充溢である處から見ると、此の娘は餘程何か思ひ込んで居るに違ひない、有繋の老巧な校長は夙くもお鯉の心中を察して了つた、これは迂濶り何方とも云へないと考へたか、滿面に溢るゝ如き笑を湛へて、例の白髯を撫でながら、

『これからの先生は、それも出來るでせうね』と答へた、成程其通りである、當時の小學校の先生位では、一家數人の口を糊する事は出來なかつた、校長先生と雖ども、敢て生活の爲の教育家では無かつたのである、然し此等の事情を知る由もないお鯉は、今の老校長の答辯では滿足する事が出來ない、質問は要點に突き進んだ、長じて後に頗る數の觀念に乏しい樣に云はれたお鯉も、幼少の時は存外其方の知識も持ち合せて居たものと見える。

『では先生、學校の先生は一ト月に幾何位のお金が頂けるのです』

老校長も聊か驚いたらしいが、答へぬ譯にも行かない。

『それは、正教員になつて、七圓位に極められるさうです』

七圓、七圓、と金の員數を聞き知つたのは、お鯉には初めてゞある、然しそれが多いのだか、尠いのだかは判らぬ。

無口で、學問好きで、腹の中は却々確固りして居る一女生徒が、偖も奇拔な質問を持て來たものかな、然し是れには何か大事な事情のある事であらうと、人の好い老校長が不可思議な目を瞬いて居る間に、お鯉は逸早く自家へ馳せ歸つて、養父の前へ『只今』の手を附くと同時に、突如り其膝に獅嚙み附いて

『お爺さん、七圓のお金でお爺さんとお婆さんと、私と三人でお家を保つて、人のお世話にならずに生活して行けますでしやうか』

と訊いた。

養父母の吃驚した顏！

（一一）少女尙知る居候の恨

――いつそ藝妓にならうと堅き決心

七圓のお金で、父と母と己れと三人、一家を構へて生活して行く事が出來るか、否かと云ふ、小娘の口からは珍らしい意外な質問に遭會した養父の兼作は、暫らくは開いた口が塞らない位に驚いた、が、倩々お鯉の容子を見ると、戯言でもなければ洒落でもない、豈敢に氣が狂つたとも想はれない、平素他から入れ智惠をされる樣な娘ではなし、是には餘程仔細のある事に違ひないと

『お前は何を唐突に、そんな事を云ふのだへ』

と、言葉を柔かにして訊ねて見た、するとお鯉の言ふ意衷と云ふものは大體斯うである、『私は他の家にお世話になつて居るより、三人で自分の家をもつて暮すのが、一番善い事と思ひます、今日學校で伺ひますと、先生になると月給を七圓貰へるのださうです、ですから私は學校の先

生になつて、自家の生活を立てゝ行きたいと思ひます、萬望、先生にして下さい』

一生懸命、お鯉は之れだけの決心を洒辯つた、默つて聞いて居た養父母の眼には、熱い涙が止め度なく流れ出るのを、如何する事も出來なかつた。

お鯉は四十餘年の生涯、眞に其心から出た計畫と云ふものは、前後只此一事のみであると云ふ、斯くも健氣な可憐らしいものである、然し機運は未だ其考へを實行する迄に達して居なかつた。

學校の先生になるのも惡い事ではない、然し今が今、直ぐ實行出來る譯のものでない、出來た處で、果して一家三人の糊口を凌いで行く事が出來るか否か、甚だ覺束ない、まづ〳〵此儘で日を送つて行くより外に道はない。

然るに一方急に物心が注いて來ると共に、我慢のならぬのは、自分等の今の境遇である。

『何だ、居候の癖に！』

『人の家に厄介になつて居る奴』

これ迄とても、耳に入らぬ言葉では無かつたものゝ現では身に泌み胸にこたへ、あゝ何と云ふ

厭な身の上、何卒して此の辛い世の中を離れ去つて、如何に貧乏暮しをしても、喰べる品を減しても、劣け目のない自由な天地に身を置く事にしたいと、お鯉は朝夕子供同志の喧嘩から惡口やらの間に、ゾッとする程厭な言葉を浴せられる毎に、何にかして此の寂しい中から脱れ出でなければならぬと決心した。

思ひは同一であつたか、無かつたか分らなかつたが、お鯉の養父母の倉太夫夫婦も亦、どうにかして此の彌生の食客を止めねばならぬ事情が差し迫つて居た、それは例の彌生からお鯉を貰ひたいと云ふ相談と、常盤家からは息子の嫁に是非呉れと云ふ交渉の板挟みになつて、何にも此の苦境から抜け出る事が出來ない、彌生には一方ならぬ世話になつて居る、然し彌生の方を斷つて、娘を常盤家に遣る事は、人の皮を被つて居る以上出來ない、斯うなつたら仕方がない、兩方斷はつて了うより外はない、然し待てよ、之を斷はれば兩方へ對する義理は濟む、然し愈々事が左様と定まれば、彌生の腹立は分つて居る、自分等も此上此の家の厄介になつて居る譯に行かない。

『偖、如何したものだらう!?』

暢氣者の倉太夫夫婦、此に至つて頓と好い分別が出ぬ、困つて了つた。

此の兩親の屈托顔を見て居るお鯉、自分は亦他の理窟から、何とかして別の活路を發見けたいと焦慮つた、何と云ても、あゝ云ふ社會に居て、日常出入る人々の話しの中に、聞くともなしに耳に入る言葉、

『何所の誰さんは、あの年齒で自前になつた、働き者だネ』

『何所の姐さんは、兩親を引取つて、家を持たした』

感心らしい話しが頻りに耳を打つ、何れ藝妓になつた人の事である、藝妓になれば家も持てる、兩親も立て過す事が出來る、是れは好い話しを聞いた。

お鯉の心の中には、何時しか一つの決心が出來た。

（一二）藝妓になつて詫證文

＝有繋に豪い女長兵衞

『私を萬望、藝妓にして下さい』

お鯉は、一日兩親の前に坐つて、一生懸命になつて左樣申し出た。

兩親は眼を圓くして、吃驚した、頓に何とも返事をする事が出來ず、暫らくは息を喘ませた儘、默つてその可愛い、健氣な養女の顏を凝視めた。

お鯉が自から藝妓にして下さい、と云ひ出したのは。

養父の兼作が彌生と、常盤家の間に挾まつて、何うにも挨拶をする事が出來ず、進退全く谷まつて、一方ならず困り切つて居る事は、子供の自分にも良く分つて居る、之は什麼しても、自分等親子が身を引くより外はない、夫よりも寧ろお鯉自身に取つて、辛くて仕方のないのは、何ぞと云ふと『居候』、『居候』と蔭口を云はれる事である、蔭口なら、未だ辛抱がある、時と

すると、それが面と對つて浴せかけられる、勝氣なお鯉には、兎ても我慢がならない、自分は幸ひ學問が好だし、學校の先生になつて、一家を支へ、兩親を扶養するのは、一番善い事の樣に想ふが、やつと七圓の月給では、それも出來さうもない、第一先生になるには未だ年齒が足らぬ、此先何年か勉强しなければならぬ、それでは兎ても出來ない相談、仕方がない殘念ながら諦めなければならなかつた。

斯うなると、藝妓の外にない、藝妓になつて立派になつた女の話しは、澤山聞て居る、自分の知て居る中にもある、是れが一番善ささうな話しだ、自分は餘り好ではないが、幸ひ習つた踊りも上手だと皆なが云つて吳れる、三味線も少しは彈ける、藝妓なら學校の先生と違つて、明日からでも出來さうだ、さうだ、思ひ切て藝妓にならう。

乃で一生懸命になつて、兩親の前に申し出たのである。

道樂者が引繰り返つて、恐ろしく堅くなつて居る倉太夫、飽まで娘を堅氣に仕樣とは思つて居るが、その經歷の然らしむる處か、藝妓と云ふものに對して、少しも厭はしい感じを有つて居なかつた、親の爲め、家の爲め、女の子が藝妓になる、而して義理の柵から脫れ去つて、後

は眞面目な生涯を送る、是は如何にも立派な事で、少しも恥かしい事ではない、倉太夫の腹のどん底には、斯ういふ了簡があつた、今日の人から見れば如何にも矛盾した考慮の様であるが、當時あゝ云ふ境遇に育つて人の間には、是も珍らしいものではなかつた。

乃で泣たり笑つたり、種々の談合があつて後。

『では照坊には氣の毒だが、一つ善い處へ頼んで、藝妓に出て貰はう』

と云ふ事になつて、倉太夫の清元の師匠で、お鯉にも猶且り師匠である清元菊壽翁の世話で、新橋は金春新道の古い藝妓屋近江屋から、雛妓に出る事となつた、之はお鯉が十四の春であつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

お鯉が新橋から藝妓に出る事に話しが定つた、と云ふ事が倉太夫の口から云出された時には、彌生の夫婦も、常盤家の主人も尠からず驚いた、何も仕方がない、左様約束が出來て了つた以上は、それ迄の事だと、常盤家では嫁に貰ふ事を斷念して了つた、然し彌生では承知しない、人の顏を踏附にした仕方だと、女長兵衛の女將さん氣負の人だけに大怒りに憤つた事は勿論

であつた。

散々大悶着の在た末、倉太夫が女將に詫證文の一札を取られる、などの一幕もあつたが、結局は男勝りの、話しの解りの早い女將の事であるから、

『宜しい、仕方がない、左様なつた以上はもう兎や角云ふまい、然し藝妓になつた以上は、押しも押されもしない一流處にならなくつちや不可い』

今度は女將が大肩入で色々と世話をする、馴染のお客に贔負にして呉れる様頼み込む、終におお鯉をしてあれ丈の藝妓の基礎を造つて呉れたとは、有繋に彌生の女將の豪いところであつた。

（一三）お鯉の名が登龍門

——借りた金は僅か五十圓

新橋の近江屋と云ふのは、其頃金春新道の角、今の資生堂の後方にあつた家で、當時新橋で三軒の金持と云はれた家の一つであつた、他の二軒は相模屋と吉野屋、今は他に大きなのが澤山出來たから、大分變つて居る事であらう。

お鯉が雛妓に出た近江屋の主人と云ふのは、其名を小川彦次郎と云ひ、東京の近在から出た人で、一寸田舍の遊び人と云つた樣な人であつた、隨分太つ腹な人だがお酒は飲ない、女將さんは何者の上りか知らないが、却々の酒呑で、兩人で隨分贅澤な生活をして、連れ立つては毎日夕飯を喰に出る、竹葉邊りの鰻の折を垂げて歸る事は宜くあつたが、抱妓の妓たちは何時も好い香ひを嗅ぐ許り、御馳走になつた事などは終に無かつた、毎日のお總菜は近在の田舍から取り寄せた午蒡とか、人參とか、筍とかを大釜に澤山煮て置て、毎日々々それ許りを當がつて

置くと云ふ御馳走、何れもうんざりしたものであつた。

遮莫あゝ云ふ社會の、抱妓に滿足な品を喰べさせる筈はないのであるが、此方は皆な喰べたい盛り、お座敷では結構なお料理の前に座つて拜見する許り、ツイ卑しい喰物の話しを、朋輩同士が集るとベチヤクチヤやる、當時名古屋から來た藝妓屋が大分あつて、中には有名な藝妓となつたのもあるが、其所の家では不思議に揃つて煮豆許り喰べさせる、小さい小皿に煮豆が十粒と、お澤庵が二片、顏を合せると

『兎ても御飯なんか頂けやしないわ』

と歎す、蜜豆が流行する所以である。

これが普通なら、お鯉も近江屋に抱へられる時、相當纏つた金を借りるのであらうが、さし當つて金の入用が有つた譯ではなし、倉太夫の意中では、一端藝妓にはするものゝ、早晩は嫁に遣るか、養子をして堅氣の人間に仕度いと思つて——眞實之が出來るものと決めて居たのだから、餘り多分の金を借りる心算はない、乃で借りた金は僅かに五十圓で、其期限は三年と定めたのである。

それから一通りの事を仕込れて、その年明治二十六年の初夏、初めて雛妓としてお座敷に現はれた。

妓名はおこいと命けた、此名は近江屋の持名で、もと此家の娘で出て居た妓の名であつた、其おこいと云ふ名は大切に存つて置たもので、今度倉太夫の娘のお照が、將來必らず大した妓になるだらうと云ふ處から、おこいの名を與へたものであるさうな、初めは假名で「こい」と書き、「鯉」の字を當てたのでは無かつたのだが、彼女の嬌名一世に轟き、殊に桂公との關係が出來てから、新聞、雜誌の記者先生方から、やれ「桂公のお鯉」、やれ「お鯉の方」などと喧傳される樣になつて、自づと鯉の字に定められて了つたのである。

鯉は出世魚である、『三十六鱗皆龍に化す』とか、お鯉の名は、果して彼女の登龍門であつたらしい。

因緣と云へば之も因緣の一つ、お鯉は辰歲の生れで、自分は龍に因緣のある女と思つて居るまた幼時より佛緣深く、夙に觀世音菩薩に歸依し、不思議な緣故から鯉魚に乘つた觀音大士を手に入れて祕藏して居る、這樣事も猶且り何かの緣、何れは一場の因緣譚となるべきものであ

らう。

其頃近江屋でお鯉の先輩——所謂姐さんになる人に、二代目とん子が居た、初代のとん子は長州出身の某政客の夫人となり、先年腦溢血で死んだと云ふ、其二代目のとん子は却々の豪妓、小造りで、肉の締つた好い姿の藝妓だが、生れ附き聲がよくて清元をかたり、其内にも二上り新内が十八番であつて、お酒は却々いける方、初めは川上音二郎に夢中になつて、或時は二人揃つて酉の市へ出掛けたが、呑助のとん子到る處で引掛けた爲め、果は大虎になつて、眞晝間おはぐろ溝の中へ落ちた儘寢て了つて、川上を面喰はせた事がある、其後は長唄の家元杵屋六左衛門、今の寒玉と浮名も立つた。

『妾しや、好い男でなけりや厭だやう』

と云ふ調子で推し通す、加ふるに大の呑助で、一日中隙なしに醉つて居る人であつた。

久しく高田愼藏氏が世話をして居り、其關係が絶えると今度は、當時賣出しの大國手、肺病博士の北里柴三郎先生がてんと打込まれて夜も晝もお傍去らず、大した御寵愛を蒙つた揚句、終に同博士の爲めに落籍されて、麻布は二の橋の側に妾宅を構へる事となり、暢氣な暮しをして

居たが、終に二十七歳の時肺結核を患らつて死んで了つた、世間からは肺病の神様の如くに尊崇されて居る北里博士の第二夫人となり、日夜特別の御診察を受くる身分となつたとん子が、旦那の專門の肺結核で亡くなつたとは、博士の遺憾は恐察に堪へぬ次第である、然し死んだとん子は恰かも先生に活ける材料を差上げた樣なもので、死して餘榮ありとも云ふべく、必ず悅んで旦那の犧牲になつた事であらう。

（一四）日清戰爭と新橋勃の興

——蛟龍の雛っ兒も遂に時を得る

明治二十七年から始まつた日清戰爭は、恰度お鯉の十六の時である、その一兩年前から東洋の風雲が無暗に險惡になつて、日東男兒の敵愾心は、火よりも烈しく燃えた、國民の元氣の充ち溢れる處、活氣は凡ての社會に漲つた、何事にも敏感な花柳界は、倏忽ち豪い景氣になつた、出征軍人の爲めの送別會、各種事業の膨脹の爲めの祝賀會、酒を飲み、お茶屋に行く機會は、眼の廻る忙がしい中でも、極めて多くある、況やその八月一日に日清間の平和破裂して、宣戰の詔勅一度び煥發せられて以來、皇軍到る處に連戰連捷、海陸軍大勝利の號外が、夜も晝も全國に飛び廻る、誰か皇國の爲め、出征將士の爲め、一杯を傾けざるを得んやと云ふ譯、萬歳！萬歳！ の聲は到る處のお茶屋の樓上から轟く。

そのお蔭を被つた花柳界の中で、尤も全盛を極めたものは、新橋であつた。

花柳地理學者は云ふ、明治維新後、銀座が開け、新橋停車場が出來、中央官衙が多く麴町に造られ、古い老舗の問屋が衰へて、新しい會社、銀行などが榮へる樣になつた結果、柳橋、日本橋、葭町が勢を失つて、新橋が盛んになつた、殊に最後に新橋をして日本一の花柳界たらしめたものは、帝國議會であり、日清戰爭である、但し、最後の議會と、日清戰爭とは、新橋の外に更に赤坂を勃興せしめた、と。

其說の當否は知らない、然し新橋をして一擧にして全國花柳界の覇たらしめたものは、實に日清戰爭である、斯ふ思ふと戰爭も餘り不風流なものでもない。

お鯉等の仲間が、目も廻る程忙しかつたのは、蓋し當然である。申すも如何な次第であるが、之も實にお國の爲めである、而して蛟龍の雛つ兒も、遂に大いに時を得たのである。

（一五）滄浪閣雨夜の品定め

——春畝公から嬉しい落選

日清戰爭の始まつた明治二十七年、お鯉が雛妓に現はれた時分、桂公は陸軍中將で名古屋の第三師團長であつた、その八月名古屋師團にも動員令が下つて、桂師團長は九月一日師團を率ゐて守衞地出發、朝鮮に涉り、その二十五日には鴨綠江右岸の虎山の戰鬪を指揮して一擧に之を屠り、二十六日には九連城を占領し、熱烈なる國民の感謝の聲を浴びた、此時には云ふ迄もなく未だお鯉とは相知らない、かな子夫人は其少し前に三度目の夫人として入れられたのである。

『打てや懲らせや清國を』などゝ云ふ、景氣の好い猛烈な軍歌などが盛んに唄はれて、忠君愛國の熱情を煽つたものであつたが一般の國民は當時まだ清國が何物であるのだか、鴨綠江が何の邊に流れて居るのだか知らない、社會の木鐸とやら云ふ新聞紙さへ、隨分途徹もない誤報

を書いて、今日まで愛嬌話しを殘して居る位だから、花柳界などの戰爭に關する知識など〻來ては、全然お話しにならない、只毎日「大勝利號外」の威勢の好い聲に勵まされて、萬歳々々と叫んで居たもの、雛妓のお鯉などは、只夢中で其日を送つて居た。

恐ろしい戰爭の話しよりも、更に彼等を脅かしたものは、お座敷に現はれる敵である、敵ではない、お客様である、柔しい事を言つて、お金を呉れる人である、大きな姐さん達を餘り見向きもしないで、少さい雛妓ばかり集めて、機會よくば襲擊をしやう、捕虜にしやうと附け覗つて居る方々である、何だかよく譯は分らないが、左様いふお客様が大分あつて、恐くて〳〵堪らなかつた。

性教育など〻云ふ事は、勿論其當時はまだ問題にもならなかつたが、花柳界に籍を置く程のものが、自然と耳にし目にする處から、戀の諸分ぐらゐ分らぬ筈はないのであるが、燈臺下暗しとでも云ふか、彼等は存外其方の知識が發達して居なかつた、お客と女中との間に、何だか厭な談判でも試みられて居る様子を見ると、少からず脅威を感じて、仲間同士

『いやなお客なんだよ、早く歸らうよ』

廊下の隅でヒソ〳〵言交して居る事がある。

とん子の旦那になつた北里博士、淺野總一郎翁などは、當時尤も雛妓の間に鬼門となつて居た人である、時の總理大臣伊藤博文公も、同じく雛妓に取つて、恐ろしい鬼子母神様であつた。

或る時の事、例の烏森の大姐さんおいく婆さんが、方々の藝妓街から選り拔の雛妓ばかり五六人引率して、大磯の滄浪閣へ出張した事があつた、例によつて賑やかなお座敷、種々面白い事があつて、座敷の空氣が變な具合になつた時、おいく姐さんが葭町の太郎さんを推薦し、之に難有い籤が落ちて、他の雛妓は無事に歸へされた事があつた、釋放されたお鯉等の連中、互に吻と息を吐いて顔を見合せ

『まあ善かつたわね』

と云つたものだ、落選も斯ういふのは嬉しい事と思つた。

其後、ズーツと後になつて桂公のお世話になつてから、伊藤公がお鯉の屋敷にお光來になつて一杯召上つた席上、公爵は例の明けつ放しの調子で

『俺もあの時分御親類になつてゐなかつたのが不思議だ、戰爭が始まつて非常に忙しくなつてね、遂にそれつ切になつて了つた、考へ出すと惜い事をしたと思ふね』

と戯謔を仰つて、一同を笑はされた事があつた。

（一六）永井素岳筆の鯉の手拭

――福地櫻痴先生の一ツ風呂

長襦袢を、五寸五分着る女は、かなり身長の高い方である。

小股の切り上つた、江戸ッ子式のすつきりした顏容のお鯉は、十六になつて尙雛妓にして置くには、餘りに柄が大き過ぎて困つた。早く藝妓にしなければならない、何所でも左樣云はれ、誰も左樣思つた。

では愈々藝妓に仕樣、と云ふ事になつたが、相當賣つた妓ではあり、一本の披露目も成るべく立派にしたいとは誰も希ふ處である、事實金も大分費るのである、然しお鯉は養父が養父であり、堅い平の座敷ばかり勤めて居たので、別に世話になつた客も無いのであるから、其費用を負擔して呉れる人もない、止むなくとん子姐さんのお古の裾模樣を着せられて、十六の歳の暮に芽出度く藝妓の披露目をした。

然し其時配つた手拭は粋なものであつた、當時養父の倉太夫は清元やら俳句やらの交際から福地櫻痴居士、永井素岳翁などと云ふ文人、象牙彫刻の名人谷齋坊主等と、親しく交際つて居たので、友達が寄つて種々趣向をした揚句、配り手拭の模様には素岳翁が是眞風の鯉を畫き、其半分を水と見立てゝ青く染めたので、當時未だ一般に斯う云ふ奇拔な意匠が流行らなかつた時代であつたから、是は面白い、粋な趣向だと到る處で褒められた。

此の手拭は、其後お鯉が羽左衛門の處から離緣となり、再び新橋から藝妓に出た時にも用ゐ、更に後年お鯉の名を、現在坂東彦三郎の妻女になつてる妓に讓つて、二代目お鯉と名告らした時にも、猶且り其儘の意匠を用ゐさせて、お鯉の名と共に繼承される事になつた。

福地櫻痴居士の事が出たから、聊か先生の事を紹介して置く、兎に角櫻痴居士は近代の粋人の大先達とも云ふべき人で、當時先生と云へば――今ではそんじよ其處等に髭も生へ揃はない先生方も澤山ある樣だが――直ちに福地源一郎氏の事に通用した位であつた、其逸話も隨分多く、其人柄は全く世俗に超越したものであつた、『さうでげす』と云ふ言葉は、當時も隨分通人ぶる人の間に用ゐられたものだが、總てに良く調和して輕く面白く聞かれたのは、先生ぐら

ゐのものであつたらう。

先生は吉原が好で、よく女郎屋の二階で新聞の論說を書いたと云ふ話も有名であるが、新橋へ來ても隨分遊んだ、勿論一流の姐さん達を集めて、面白可笑しく騷いだもので、特別の關係は一向結ばない、それでも若し何かの御用があると

『一寸、一ツ風呂入つて來やす』

と云つて、出て行く、それは名の知れない小待合へ行つて、藝妓を對手にする事であつた、斯の道に掛けても慥かに達觀して居て、遊びをちやんと二つに區別して居られたのは流石である。

それだから座敷が色氣拔で、全く面白い、何んな藝妓でも喜んで行く、行つて遊ばして貰ふ、皆なが氣の置けない先生、面白い友達と、思つて居る。

『まあ先生のお風呂は永いわネ』

眞面目な事のやうに云つて、笑ひながら待て居る事もあつた。

永井素岳氏、これ亦福地先生の少し小さい樣な人で、風流な文章と、奇拔な畫をよく描かれ

る、常に芝居の幕の意匠をしたり、自分で書いたりして、芝居者にも見物にも喜ばれる、先年新橋演舞場で上演した「花かたみ」は素岳氏のお作ださうだが、評判が好かつた、兎に角近年稀に見る通人である。

谷齋は坊主頭で、年中緋縮緬の羽織を着て、相撲が始まると必ず毎日出掛けて、桟敷廻りをする、幇間の様な所爲をした人だが、實は牙彫の名人で、此人の彫つた品は、小さな物でも今では大層な價がする、瓢逸な通人であつた、之れが尾崎紅葉山人の實の父親とは知る人が尠からう、紅葉山人は固く此事を祕して居た、山人は隨分何所へでも行つた人だが、相撲へは終に一度も行かなかつた、父親が幇間の眞似をして歩くのを見るに忍びなかつたのであらう。

紅葉山人とお鯉との交際に就ては、面白い話がある。

（一七）金春に照近江の神燈

——果報な旦那は矢嶋大盡

龍は雲を得て、益々其英風を發揚する、お鯉は藝妓になつて、愈々其全盛振を示した。

毎日毎夜のお座敷は、到底廻り切れぬ程、到る處で珍重され、好遇され、持てはやされた、彼女は一本の扇と、一挺の撥とを携へて、花柳の巷を横行し活躍した、形容して云へば、五陵の若紳士爭つて纏頭し、一曲御祝儀數を知らず、今年歡笑し復明年、秋月春風等閑に渡る、と琵琶行で歌つて居る通りであつた、瞬く間に近江屋の借金も還し、禮奉公も見事に濟んで、今度は勢ひ看板を分けて、自前にならなければならぬ破目に立到つた、蓋し彼の社會に於て、當然の道程である。

お茶屋からも左様勸める、近江屋からも其話しを持ち掛けられる、朋輩の藝妓等は、何故お鯉さんは自前にならないのだらう、那れ丈の藝妓になつて、全盛を極めて居ながら、と、寧ろ

不思議がられて居る程であつた。

處が、此自前になるに就ては、莫大な金が要る、尋常の藝妓稼業をして、儲け得たお金では到底之を出し切れる譯のものでない、此の負擔に應ずる爲めに、大抵の藝妓には皆旦那なるものがある、厭でも嫌いでも、皆目を眠つて此旦那なる大藏大臣に死線を越へた奉仕を餘儀なくされて居る、甚だ以て人道に外れた、可哀さうな事の樣だが、其社會に育つて、年中左樣いふ實例を見聞して居る身には、之が當然の事であつて、決して非常に苦痛な事でもないらしいのである。

幸か、不幸か、お鯉には未だそれが無かつた、道樂者上りに似合はず、今では人並外れて堅氣の人間になつて居る養父の倉太夫は、お鯉にそんな客を持せる氣などは毛頭ない、事實お鯉には、左樣いふ質のお客は、一人もなかつた、從つて自前の話しが始つた處で、それに要する費用の出處などは頓と無かつたのである、如何にも致し方がない、事此に到つて、倉太夫も礒と當惑した。

元來が、彌生に居た昔しから、自分の養女を藝妓にして、それから尋常に嫁に遣らうと考へ

て居た倉太夫、立派に出來上つた藝妓の事は知つても居り、考へても居たが、其一人前の藝妓になる迄には、種々苦しい階段を經て行かなければならぬ、と云ふ事情には、一向氣が附かなかつた、お芽出度い位のものである。現實暴露の悲哀も、此に至つて極まる。

可愛さうではあるが、最う左樣云つて居られる場合でない、頑固な倉太夫も止むなく決心の臍を固めて、お鯉を自前にする爲めに金があつて親切な旦那を搜す事になつた、左樣なると、根が人の善い倉さん、自分は未だ彌生の世話になつて居るので、其家へ來る客には自然馴染が多い、此の中で誰が一番お鯉の利益になる客であらうかと考へ拔いた擧句、此人ならばと決めて、賴み込んだのは、當時天下の糸平の番頭で、兜町に仲買の店を出して居た株式仲買通稱山平事矢嶋平造さんであつた。

矢嶋さんは實業家である、左なきだに向ふ行きの强い男兒、新橋の指折の名妓の後ろ楯となつて呉れと賴まれて、イヤと首を横に振る程の馬鹿者——でも無ければ、怜悧漢でもなかつた、騰ると見込んだ相場に、買註文の玉を澤山附けられた程に喜んで、二つ返事で倉太夫の賴みを引受けた。

山平さんは其頃五十位の人で、當時の人には善くあつた、むつちりとして頑固な、そして善く譯の分つた粋な人であつた、一中節が好で、よく自分でも唄ふ、清元の梅吉の家内の都一いなを連れて諸所方々のお茶屋を遊んで歩く、新橋へ來ても、よく柳橋の藝の好い藝妓を呼ぶ、取卷きの幇間には清元菊平、清元魚見太夫などが、常にお氣に入りであつた。

お鯉は山平さんに依て、初めて、旦那なるものを知つた。

（一八）辛いかな旦那商賣

―平岡大盡が得意の悪擢

『照近江のお鯉』

抱へ主の近江屋から看板を分けて貰つて、初めて宗十郎町に一軒の家を買つて、自前の御神燈を掲げたのは、お鯉が十七の歳の暮であつた、別に近江屋に借金も無かつたので、大した金も要らなかつたが、家を買つたお金は恰度三千圓であつた、其時分では相當の額であつたのであらう、家號の「照」の字はお鯉の本名、兎に角一軒の藝妓屋の姐さんになつた譯である、而して十三歳の時彌生に居た時分から、一生懸命の希望であつた、養父母を居候の境遇から免れしめ、自分の家へ引取る事が出來る樣になつて、斯んな嬉しい事はないと思つた、其滿足や察するに餘りある。

自前になつてから、お鯉の藝妓振は益々揚る、全盛は並ぶ妓も無い位ゐ、矢嶋さんは相變ら

ず太皷末社を連れて、方々のお茶屋を飲み歩く、始終お鯉の行く先々を廻り歩いては、お座敷の明くのを待つて居る、如何に遲くなつても、平氣で悠然と待つて居て呉れる、其待ち方がまた振つたもので、其間は大好な一中節も謠はぬ、一服喫つては煙管を指で廻し〳〵凝つと考へ込んで居ると云ふ寸法、老巧の取卷き連も此のお對手には降參つた。

山平さんは好い人である、お鯉の顏が見えぬと云つて、決して腹を立てたり、面白くない顏をしたりしない、然し其胸の中を割つて見れば、斯うやつて待たされて居るのは、決して好い心地である筈がない、誠にお氣の毒のやうな、可愛さうなやうな、然しながら又面白い好い氣味のやうな、遊び仲間の惡友等は種々な事を云ふ、對手が賣り出しのお鯉の事ではあり、此事が倏忽ちあの界隈で大評判になつた。

『ナニ、山平の煙管廻し、此奴は珍だ、振つて居る、一趣向なくつちやならないね』

事あれかしと、腕に撚を掛けて待ち構へて居る連中、尾に鰭を附けて振れ廻る、是が當時花柳界、演藝界に大通人を以て知られて居る平岡大盡の耳に入つたから堪らない、忽ち一枚の惡摺になつて、大々的に宣傳された、評判は鼎の沸くが如くである。

其惡摺と云ふのは斯うである。

山平さんが大きな角を生して、大きな〳〵煙管を廻しながら考へ込んで居る。其にそつくり善く似て居る似顏の山平さんの前に。

梅吉の女房の一いなの角が見える、其傍に梅吉が出先で、若い女と睦まじく語り合つて居る、其前には又數多の取卷連が、後方へ尻餅を搗いて居ると云ふ圖柄を漫畫風に書いたもので、これを蒟蒻判にして刷り上げ、馴染の茶屋、待合へ配布らせる、到る處でワツと云ふ騷ぎで、之は面白い、此奴は素敵だと、或は金屏風の裏に張り附けたり或は恭々しく三寶の上に載せて、床の間の正面に置く。

お鯉が其座敷に現はれると、客も、藝妓も、女將も女中も、その惡摺とお鯉の顏を見比べて、クスリ〳〵と云ふ始末、あんなに困つた事はありませんでしたと、お鯉はよく當時の狀態を話した。

平岡さんは斯ういふ事が大好で、また大變上手である、氏が明治以來の大通人として、花柳界、演藝界に雄飛した事は、天下何人も知らぬ人はあるまい、平岡大盡の名は、今でも常に人

の噂さに上る、此平岡さんは又、お鯉の一生に少からぬ關係を有つて居る。

平岡大盡は藝と云ふ藝、凡百る藝に通じて居る、全く其道の天才とでも云ふのであらう、習はずして善く三味線を彈き、種々の唄を謠ふ、新曲の節附けをやる、舞踊の振を附ける、果は自ら「東明節」と云ふ新しい三絃曲を案出して、今日にては已に一流の家元とも云ふべき位地に立つた、先づ行くとして可ならざるなき才人と云ふのであらう。

平岡大盡が素人藝術家として、專門家たる各派の師匠連に舌を捲かせる程、遊藝に堪能なのは、素より其天禀と修養とによるのであらうか、別に血統上の因緣のある事も考へねばならぬ、それは一中節に於て近代の名人と云はれた都い中が、大盡の叔父に當る、大盡は卽ち名人い中の甥に當る人である事も、忘れてはならぬ事である、現今高橋箒庵氏が、昔しの御職業の實業家よりも、お樂しみの茶道よりも、平岡氏に次ぐ「東明節」の準家元として、斯道の好事家間に重きを爲して居る所以は、夫人が平岡氏の長女の葉子さんである關係から來て居る、今でも不相變藝道の方に努力して居られるのは人の知る處である。

（一九）道樂で無代の料理屋

——藝妓教育の虎の巻

お鯉は多年の宿望が全く叶つて、今では照近江のお鯉と云ふ看板主、一人の女中を除いては、親子三人水入らずの生活、何不自由なく、眞に幸福な月日を送つて居た。

兩親は全く大滿足、養父の倉さん、今迄とはちがひ用の無い隱居の身の上、毎日の生活が無聊で堪らぬ。それに大の酒好き終日德利をはなされぬ方が多い。

斯う毎日遊んで居ても仕方がない、第一お天道樣に勿體ない、何か手に合ふ職業をして、自分の飲み代だけも稼ぎ出さなければ娘にもすまぬと云ふので、木挽町へ一寸一杯といふ樣な小料理屋を出した、何しろ料理は申分なく、始終おつな品を喰はせるし、幾何儲けなければならぬと云ふので無いから、勘定は馬鹿に廉いと來て居るので、開業早々から千客萬來の有樣、幸先頗る好しとは至極結構であるが、同時に亦甚だ結構でない事がある。

この倉さん清元を本職位にやる外に、俳諧も一寸やつて、本所の其角堂宗匠の弟子となり、大に風流を氣取つて居るので、其方の友達が却々澤山ある、例の永井素岳、谷齋坊主などが其仲間の先達で、其他清元の連中などが、件の小料理屋へ毎日盛んに入浸る。

主人の倉太夫、大に板前に納つて、茶壺石がゝつた酒選料理と云ふのを造へる、乙な料理ではあるが、手の要る事、資本の費る事一通りでない。

通な客が見えると

『今日はネ、煮抜き豆腐が出來てる、まあ一つ喰べて見て呉れ』

此品は乙だと、何れも大滿足で箸を取るが、何と云つても根が豆腐である、如何に之を一日掛りで、種々な調味料をふんだんに造つて、念入に煮込んだと云ても、左樣高くは取れぬ、兎ても商賣になる代物ではない。

『今日は、枝豆の豆腐で田樂を造へたが、どうだ、一寸乙だらう』

新枝豆を臼で挽いて、青い豆腐を造へて、獨り嬉しがつて居る。

斯うなると、お客も拙な註文も出せない、倉さんが出す自慢の料理に舌鼓を打つて、お世辭

の百曼陀羅も並べて引下る、何だか跡が惡くて『姐さん勘定を』とも言ひ出し兼る、結局倉さんの御馳走になつて了ふ譯、是で料理屋の行き立つ筈がない、亭主の倉さんは、それでも面白からうが、毎月の尻拭ひをさせられるお鯉は、兎ても馬鹿々々しくて、遣り切れたものでない。

『そんな事をするなら、何も態々木挽町まで出掛けなくつても、自家でやつて居て頂いた方が宜いわ、お客樣も其方が心持が快いでしやう』

と云ふと、倉さんも少々氣まりが惡くなつて、木挽町の家を閉鎖んで自宅に籠城、此で無料の料理屋商賣を始める事になつた。

倉さん、それ程料理好で居ながら、自分は鹽梅を試る外、何も喰べない、青唐辛子を一本白燒にしてかじりながら、朝からチビリ〳〵と飲るのが樂しみ、それで、飯と云ては、一日に一度お粥を煮て喰べる、好な品は鰻の蒲燒で、よく中串を誂へては酒の肴にした。

お鯉が藝妓になつてからは、倉さん何卒かして、養女を昔時の小本にある樣な本當に藝妓らしい藝妓にしたいと思つて、一生懸命に教育する、その倉さんの理想の藝妓たるものが、亦却却大變なものである。

（二〇）座敷は十時限りの事

——自宅へ歸つて亦お勸め

碌々芝居を見た事もない文士先生が、脚本を書き、滿足に茶屋遊びをした事もない男が、通客の道を論じ　藝妓哲學を講ずる、是も流行とあれば是非もないが、お鯉の養父の倉太夫が、其娘を立派な藝妓に仕立上げやうとして、朝夕言て聞かせる「藝妓の道」、「藝妓の勤め」なるものは、決して生やさしいものではなかつた。

『まづ藝妓は、話術が拙劣では不可い、お座敷に興が無い、何時でも話題を澤山に考へて置かなければならぬ、但し、下品な話しは宜しからず、人の噂さ話は罪のないものに限る、名高い家の料理は、一通り心得置くべし、例へば鰻の評判が出れば、何所の蒲燒は煮汁の具合は可いが、燒け過ぎて居る、何所のは辛口だ、彼所のはふつくり燒けて居る、位の話しが出來なければならない。』

倉さん自分が鰻が好だから、鰻の批評を第一に持ち出す處なども愛嬌だが、それが爲めに、神田川、竹葉、和田平、駒形の前川など、主立つた鰻屋へは、批評の出來るまで連れて行つて見學をさせる。

鰻ばかりではない、中華亭の鶉の椀、島村、小常盤の汁の鹽梅まで、眞實の料理の味の分る迄、何度でも連れて行かれる。

自分では喰べに行くが、藝妓として座敷へ出た時には、嚴ましい規則がある、倉さんの曰く

『藝妓はお座敷では、御飯は勿論、何物も喰べては不可ぬ、お座敷は藝妓が喰べに行く處ではない』

更に嚴重な教訓がある、現の藝妓や、お茶屋が聞いたら、吃驚するであらう。曰く、

『夜の十時過には、如何なる事があつても、客席に居てはならぬ。

藝妓は、島田より外の髪に結て座敷に行くべからず』

お座敷十時限りの規則も、隨分嚴格な譯だが、島田以外絶對結ふべからずと云ふ理窟も、毎日のお座敷になると、却々骨の折れる事で、感冒を引いたり、頭腦が痛かつたりする時、無理

に押して現はれる場合、お客から其儘で良いからと云はれて、今なら束髪と云ふ處、其頃は銀杏返しか何かで御免を蒙つたものだが、倉さんは夫れは不可いと云ふ、歸つて直に解いても可いから島田に結て行け、島田に結へない程の容體なら、座敷に行かずと好いと云ふ。

彼の社會の事ではあり、稀には樂に粋がつて、結び髪にもし度かつたが、未だ年齢も若かつたし、酒も澤山は飲まなかつたので、親の命令を背く程の勇氣もなく、年中島田より外の髪を結つた事もなく、夜は十時の聲を聞けば、大急ぎで歸つて來たものである。

家では倉太夫、一日がゝりでお鯉の好な料理を造らへて、チビリ〳〵飲りながら待つて居る。格子戸がらり、『只今』と云ふ聲を聞くと、それ待ち兼ねたと許り、種々の御馳走を竝べ立て吳れるのは嬉しいが、偖、それからが大變である。

『一寸、お酌をして吳れ……さう〳〵、左樣いふ風に酌ぐのだ——爪彈で良いから、おさん茂兵衞を少し許り彈いて吳れないか、私が唄ふからね』

得意の清元が始まる。

何の事はない、お鯉は自分の家へ歸つて、また一座敷勤める譯である。八釜しい許りで、御

祝儀も線香も附かぬお座敷！

時には、長い講釋が始まる。

『お前が今お皿に載せた一尾の魚が、斯う載せると、型も美く、生きてる樣で、作法にも協つて居るから、美味もある』

有繋に料理通である丈、言ふ事が却々凝つて居る、お鯉は自然に其言葉の奥の味ひを覺えて、後になつて獨り發明する處が多かつた、親の恩はやはり有り難いものだと思つた。

（三二） 山縣元帥こ馴染の女髪結

――伊東家小文は模範的の好い藝妓

烏森に、吉原から來たお夏と呼ぶ、六十二三の髪結があつた、島田より外の髪は結はぬ、それも油を一切附けずに、頭に水を振り散らして、水だけで結ふのであるが、齒が無くて元結ひを手でしめるのと、油をつけぬので、一日よりもたぬ、朝結つて座敷から歸ると、吃度根が拔けて了う。

酒の入つた湯呑を、始終傍に置いて一日中呑みながら結つて居る、お夏の島田は鬘のやうだと云はれた。

このお夏、年齒こそ老つたれ、島田を結はしては當世並ぶ者のない手腕なので、其名を花柳界に知られて居たのは當然だが、不思議なのは時の元老山縣、伊藤、井上などの諸公をつかまくて、まるで友達扱ひである。これにはまた理由がないではない。

新橋や木挽町が、まだ一向に發展しない明治の初年、築地の『すみ家』か土橋の『賣茶』かと云はれた一流のお茶屋があつた、その賣茶は今の新幸町、公設市場の背後の堀端にあつたのであるが、維新の元勳木戸、大久保の兩公を始め、之に附隨ふ豪い人達が、政務の餘暇には屢屢遊びに來て、豪快を極めたものである、どうせ其頃の事、件の大官連何れも定つた藝妓と其家へ泊り込んだ。

お夏は始終其處へ藝妓の髪を結いに行つた、禮儀も作法もみだれがちの時代だから髪を結いに來るお夏と、宿醉未だ醒めざるお客様と知り合になるのも無理はない、殊に純江戸ッ子の齒切の好い會話をするお夏。

『面白い奴じや、一杯飲ませろ』

時には豪いお客のお相手もする、其お客様方が廟堂に納まつて大臣となり元老となつたのである、女髪結と元老との交際もできやうと云ふもの。

殊に山縣公は其頃から粋な人であつた。新内がお好で始終稽古をして居られた、藝妓の髪容の事も良くお分りになる、結つて居るそばから、色々と註文を出される、井上公はまた女の着物

が善くお分りで、小紋の染め方などの指圖をされて、却々に嚴ましい、お夏はよく這樣昔し話しをして聞かせた。

『お鯉さん、今日は何所へ行くんだい』

『今日は目白の山縣さんへ行くのだから、歸るまで根の拔けない樣にネ』

もう直ぐに結い上らうとする島田の元結を、お夏はパチリツと鋏で切つて

『おい、お酒を一ぱいにしてお呉れ』

湯呑を下梳の前に突き出して、滿々とお酒を酌がせる、此奴をグツと呷りながら、島田を結ひ直す。

『山縣さんは髮が嚴ましいのだからね……お夏が宜しくツて云つて頂戴』

目白に着いて、公爵の御前に罷り出る、あの謹嚴な御容子に對して、女髮結の言傳も如何と思はぬでもないが、左りとて申上げぬ譯にも行かぬ。

『御前、あの烏森のお夏が宜しく申上げて、と申しました』

老公のお顏に圖らず微笑が漂ふ。

『おゝ、お夏か、丈夫で居るか、おぬしの髮は普通の髮結ではないと思ふてをつた、後方を向いて見せい、おゝ好う出來ちよる、未だ腕がにぶらんのう、俺からも善う云ふたと云ふて呉れ』

有繋に往事を追懷して感慨に耽られるお顏が面白くて、お鯉は目白へ出る度によく、お夏の傳言を齎らし、また歸つては御前の御言葉を土産にして、お夏を喜ばせた。

このお夏の處へ、始終髮を結いに來る藝妓に、伊東家の小文が居た、年齡はお鯉より四つ上の、如何にも藝妓らしい藝妓、あゝ好い容子ネ、と、お鯉は最初一目見た時から、感心して了つた。

其後長い間に隨分澤山の藝妓を見たが、小文ほどの藝妓は終に見なかつたと、お鯉は常に語つて居る。

（三三）梅幸と夫婦約束の藝妓

―旦那の標本加東德三

名妓小文の頭髪を、名人のお夏が結い上げる、夫れで初めて立派な藝妓が出來上る、加之も此の二人が揃ひも揃つて、六ケしやの嚴ましやと來て居る、手數の費る事一通りでない。

結つても、結つても、思ふ樣に出來ない日は、結び髪にして止めてしまふ。

其の日はお座敷を休んで、妹のやうに可愛がつて居るお鯉を誘ひ出す。

『お前さんもお休みよ』

兩妓連れ立つて、淺草の觀音樣にお詣り、田甫の大金邊りで御飯を喰べて、仲見世の武藏屋で玩具でも買ひ込んで遊んでしまふ。

現時こんな藝妓は、藥にしたくもあるまい。

小文は淺草聖天町の鳶頭を父とし、曾て深川藝妓で鶯啼かせた事のある美い女を母とし、

兩人の間に出來た獨り娘で、それこそチヤキ〳〵の江戸ッ子、頭の尖から足の先まで粹に出來て居る。

新橋の伊東家から藝妓に出て、十七の歲に尾上榮三郎――現の梅幸と夫婦約束をした、榮三郎は其頃賣出しの若手俳優、是が一所になつたら、夫こそ美しい一對の夫婦雛、似合の夫婦であつたらうが、榮三郎は音羽屋の養子で未だ親掛りの身の上、小文も亦抱妓の身で、思ふ樣にならなかつた、其內頭山滿翁で名高い烏森の濱の家の女將の鑑別に叶つて、落籍となり、濱の家の息子の嫁になつた。

然し小文には榮三郎と云ふ者がある、飽まで眞面目に榮三郎を夫と思ひ詰めて居る小文が、濱の家の嫁で圓滿く納まつて行く筈がない、瞬く間に出て來て、板新道に松伊東家の神燈を揭げ、自前となつて現はれたのである。

小文の父と云ふのは、全く俳優が扮した舞臺の上の鳶頭のやうな男で、未だ年齒も若く、之が消防夫の服裝に革羽織を着て、小文と親子運で何所かへ出掛ける樣子なぞは、宛然で芝居から抜け出して來た樣だと、近所の人が皆な出て見た。

若衆顔の、すつきりとした體つきで、お夏の結つた潰し島田、唐棧の着物に唐棧の袢纏、更紗と黒繻子の帶を引掛けに結んで、吾妻下駄を穿てお湯に行く姿を、ソレ小文さんがお湯に行く、と、知つて居る者までが脚を止めて見送つた位である。

父親がまた大の娘自慢、『俺ン處の小文が――小文が』と、隨分娘の爲めに啖呵を切つたものだが、誰も可笑しいとは思はず、當然の事の樣に容したもの。

小文は帶の心には、必ず鹽瀨を入れて居た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

其頃の藝妓も藝妓だが、客もまた客であつた。

兜町の加東德三さんが、小文の旦那であつた、加藤さん小文に梅幸のある事を承知で、何とも云はない、どころか、小文ほどの藝妓で俳優との意氣張りでは、定めし金の要る事だらうと、ちやんと心得て居たものである。

お鯉は此の小文と姉妹の樣にして、影の形に伴ふ樣に、常に一所に歩き廻つて居たので、自然芝居道にも出入する事となり、後に市村羽左衛門の處へ嫁に行く動機になつたのである。

其頃の芝居は、團、菊、左の三名優が鼎立して居た時代であるが、花柳界との關係に於ては、團、菊の二人は已に老いて、そのお座敷にも現はれる藝妓の顔は殆ど定まつて居る位ね、廣くヤイヤイ云はれる次第ではなかつた。

同じく老いたりと雖ども、左團次の人氣は一般的で、藝妓も、雛妓も、殆ど皆蔦の紋を附けて騷いで居た、全く好い男の老爺さんであつた。

後に神田鍾藏さんの處へ行つた松葉家の松吉、始めは神明の藝妓ですゞめと云つたが、餘り好い藝妓なので無理やりに新橋へ引拔かれて、松吉と名告つた、此妓などは大の左團次贔負で、何でも自分一人で左團次に幕を贈りたいと云ふ心願を起して、一生懸命になつて居たが、遂々其志望を果したのは豪いものだと、當時專ら評判であつた。

現の歌右衛門の福助は、若手俳優で綺麗ではあつたが、只ぼーッとして居て、別段騷がれなかつた。

（二三）小文を嫌ふ無心中

――意外の色男は井角將軍

數ある明治の元勳中、其豪氣と、機略とを以て異彩を放つて居た故後藤象次郎伯の愛妾に柳橋藝妓の小みねと云ふのがあつた、恐しい美人だが、顏が馬鹿に長い處から、馬の小みねと云ふ綽名を附けられて居た、此人却々の容態家で、髪を洗ふにも女中が左右に附き添つて居なければならぬと云ふ手數の要る人、一時後藤伯の寵を專らにして居たが、伯が明治座の茶屋の花家の娘と關係が出來たのに憤慨して、强て暇を貰つて、木挽町に――今の梶田家の處――巴家と云ふ待合を出した、相當り繁昌したものである。

お鯉の旦那矢嶋平造、小文の旦那加東德三、それに今尙健在で老たりと雖ども尙且つ政界の一方に雄飛して御座る井上角五郎氏などが、盛んに巴家に遊びに行く、井上さんのあの痘痕には、若い妓などは何れも恐れを爲したものだが、中に一流の藝妓で立花家の千代子と云ふ特志

家があつて、井上さんへ大の肩入れ。

『妾しは何でも井上さんの處へ行くわ』

と云つて、大に一座のお客や藝妓を驚かしたものだが、更に吃驚したのは御本人の井上さんであつたと、廊下雀がペチヤクチヤした、此の千代子が卽ち現の井上氏の令夫人である。

加東德三さんは人も知る如く銀行の重役であつた、お金の事では小文に不自由を爲せない、小文は何時も眞新らしい手の切れさうな紙幣を三百圓位裸の儘帶の間に入れて、よくお鯉を伴れては劇場へ出掛ける。

現今は左樣でもあるまいが、其頃の芝居道と云ふものは、物凄い邪道であつた、樂屋の入口から、役者の部屋に行くまで、それは〳〵幾個もの關所があり、幾人もの人間が居て、決して只では通さない、一々相當の附屆けをしなければならない、『地獄の沙汰も金次第』と云ふ言葉が、全く極端に實行されて居る處であつた、それを亦當然の事の樣に、出す人も貰ふ者も思つて居たのだから、世話はない事であるが、隨分淺間しいものと云はねばならぬ。

其惡どい社會の眞中央へ、平然大手を揮つて入つて行つた小文の費用は大したものである。

單に劇場ばかりではない、梅幸の家、新富町の音羽屋の家へ行つても同じである、小文は梅幸との關係がある爲に、女中の仕着から、いまの六代目菊五郎――其頃の幸ちやんの衣服まで造へてやつたものだ。

小文が這樣に心中立をして居る時、肝腎の梅幸はもう徐々小文に秋風が立つて居た、夫婦になる事などは想ひも寄らぬ、頻りに逃を張つて、好い加減に遇らう、然し之が小文には分らぬ、凡てを善意に許り解釋して居る、梅幸が控へ目にして居るのは、養子の身の上である爲と考へて、一生懸命に音羽屋の家の具合の好くなる樣に手を盡す。

果は何日行つても、梅幸が居ないやうになる、小文も仕方がないから音羽屋の家の松助、梅助、菊四郎、蟹十郎、幸藏などと云ふ弟子達を伴れて、向嶋の奥の植半へ遊びに行く、それ〴〵藝妓を呼んでやつて、大勢で面白く遊ぶ、義理にも來さうなものと待てど暮せど梅幸は姿を見せない、弟子達も氣を揉んで何とかして御機嫌を取り結ばうと、一晩中床の間へ乘つて踊つて見せたりなどする、そして小文とお鯉とを遊ばして呉れる、然し梅幸は終に來なかつた。

（二四）五代目菊五郎の妻と妾

――六代目が子供心の戀

小文が尠からず金を費ひ、心を用つて、約束した情人梅幸の爲めに、實の有ッ丈を盡すに拘はらず、梅幸の方では常に逃腰に許りなつて居る、お鯉には此間の消息が確乎りと分つた、餘つ程明瞭に云つてやらうかとも思つたが、左樣すれば生眞面目に男の事を思つて居る小文が何うなる事かと心配されて、年弱の身のそれも出來ず、獨り竊かに梅幸を憾みながら、小文の爲に胸を痛めて居た。

氣持こそ違へ、同じ樣に連れ立つて小文やお鯉が音羽屋へ出入して居た頃、今の六代目の幸ちやんは、恰度十二、三の腕白盛りであつた。

梅幸は頭腦の冷靜に働く、世慣れた怜悧者であるが、一寸また人と變つた處がある、喰物では香の物を一切喰はず、中にも澤庵の香ひが大嫌い、見た丈でも胸が惡くなると云ふ人である、

それが爲めに、小文は死ぬ迄香の物を喰べなかつた。

梅幸は氣の詰る樣な六かしやだから、養母も喰べ物の事では氣兼をして居た、別に調へられた自分のお膳に對つても、先づ靜かに、皮肉らしい眼をして膳の上を見廻はす、それからチビリ〳〵と傾ける、却々の酒豪である、六代目の幸ちやん惡戯の烈しい盛り。

『兄さん、此奴ア如何だい、美味いんだぜ』

兄さんの大嫌いな澤庵を鼻の前に突き出す、すると梅幸は默つて、スーツと立つて了ふ。

『幸ちやん、お止しよ、澤庵だけはネ』

母親が六代目を制止める、やんちやんの幸ちやん、却々引込まない。

『何でえ、名古屋贅六の癖に、納まつて居やあがらア』

兎ても手の附けられぬ亂暴者であつた。

この幸ちやん、如何いふ譯か子供心にお鯉が好で、自分のお嫁はお鯉さんにすると定めて居た、父の五代目を始め家中の者に披露して、

『ネ、お鯉さん、いま皆なに布令を廻して來たんだからね、好いだらう』

無邪氣で可愛い〳〵お婿さん、機嫌の好い時は頗る遊び對手に可いが、少しお冠りを曲げ出すと、どうしても寢ない、お鯉さんを呼んで來い、呼んで來なけれや寢てやらない、と、大の字になつて暴れる。

『幸ちやんが、どうしても寢ないで困るから、一寸で好いから來て下さい』

電話で呼ばれてお鯉が行く、行くと、櫛で頭髮を搔いて吳れ〳〵ば寢ると云ふ、添い寢をして自分の櫛で散切頭髮を搔いてやると、成程、畫の亂暴疲れて草臥れて居るから、直ぐ寢て了ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

それから一、二年の後、お鯉が市村羽左衞門の嫁になつた時、幸ちやん大憤懣で容易に納らない、何でお鯉さんを家橘兄さんの處へ嫁に遣つたんだと暴れる。家橘が音羽屋の家に行くと、幸ちやんすつかり五代目張で、尻を捲つて啖呵を切る。

『いくら兄貴だつて甚からうぜ』

などゝ、老成た事を言ふ。

『幸坊、今日は宮川の鳥肉で我慢して吳れ、それとも躍金の料理にしやうか』

『吝に刻さむねへ、兩方ならべれあ詠と歌だあな』

意外だ强請り場の、可愛い〻いなせな兄さんも、既う幾人かの親になつて居る。

（二五）澤村源之助の三角關係

――役者が男地獄と云れる譯

江戸時代からの贅澤な染物屋に、笠仙と云ふのがある、代々淺草福富町に住んで、意氣で、高尚で、確實な仕事ばかりを專門として居る、其代り直段も滅法不廉い、今ではそんじよ其處等の連中まで、『笠仙に染めさした』などゝ通がつて居るが、三四十年前までは、此店の御得意には、餘程の好事家でなければならなかつた、藝妓では、柳橋でなければ、此店の品を着なかつた位である。

何事にも、派手と贅澤の有ん限りを盡した小文とお鯉は、何時しか笠仙のお得意になつた、或時古代紫の鹽瀨に、光琳の菊を白拔に染めた丸帶を締めて、朋輩をアツと云はした、洗い髪のおつまが甚く此帶に感心して、是非同じのを染めさせて呉れと賴まれて、拵へてやつた事がある。

此の笠仙を新橋に紹介したのは、小文とお鯉とであるが、今一人、今新橋で金滿家の大姐さんで納まつて居る新小川の喜代次がある。

喜代次は元柳橋の藝妓で、それから一寸新富町に居た事もあり、終に新橋に落着いた、若い時から澤村源之助と言換して、隨分と入れ揚げたものである、柳橋から新橋まで引越し歩いたのも、皆な源之助の爲であると云ふ。

よく俳優を男地獄と云ふ、其言葉の當つて居るか、否かは知らないが、其道に掛けて手腕の好い俳優は、隨分と關係の藝妓などを絞り、苛責み、終には後脚で砂と云ふ事をする、之を何とも思はない、處か、寧ろ豪い奴として尊てられたものだ、中には舞臺の上より、此の方に優れた腕前を有つて居る人もある。

源之助が若い時から今日までの女は、大變な數であらう、必要もないから、今此でそんな洗い立てはしないが、兎に角或る意味での色男、不思議な魔力を有つて居る人である、花井お梅なども其中に目立つた一人であつた。

喜代次と源之助は長い間の交情である、俳優や藝妓で此關係を知らない者はあるまい、喜代

次は商賣柄に似合はず、人の好い正直者で、一圖に源之助の事を思ひ續け、末は必ず夫婦と定めて居る、誰の世話にもならず、藝一方で稼いでゐた。

其頃、神奈川縣の知事沖守固さん、横濱から東京へ泳ぎ出しては築地の精養軒に宿り込んで、毎日のやうに各地の花柳界を荒し廻る、遊びに掛けては時の元老大臣に劣らない豪傑である、其頃日本一の美人と云はれた柳橋の小高と關係し、之に三人も子供を生ませて、お顏に似合はない肖似者と云はれた。

然るに此の小高、旦那の沖さんに匿れて、源之助と宜しくなつた、祕し隱しにでもする事か、お座敷などでも平氣で源之助の惚氣を云ふ、手のつけられない女であつた。

之が筒抜けに喜代次に聞えるから、堪つたものでない、何も彼も氣に入らなくなつて鬱ぎ込んでしまふ、之れが「喜代次のお冠り」と云つて新橋村名物の一つとなつた。

喜樂の女將が見るに見兼ねて、喜代次へ同情して下さいと賴んだのが、誰あらう源之助に小高を奪られた沖さんであるのも面白い。

（二六）年齒を返せと無理な註文

―泣て笑つて飲み分れ

大通人の沖さん、腹の中では何と思つて居るか分らないが、表面に出して彼是れ云ふ程の野暮でない、事實言つて見た處で始まらない、喜樂の女將が同病相憐れむと云ふ處へ附込んでか、喜代次への同情を沖さんに求める、沖さんは薩張りしたもので。

『よし〳〵、俺には大いに同情の種があるんだからね、子供の三人もあるから、歸るか〳〵と思つて待つて居るが、歸らないよ、流石の俺も驚いたよ、さあ、喜代次ゆつくり話さう』同情と云ふ文句が一つの通り言葉となつて了つた。

『喜代次の「同情」が始まるから來いよ』

と、何か落語の會でも始まる樣に、お座敷が掛つて來て、懇意な仲間が皆な呼ばれたものである。

藝妓にも貞操がある、喜代次は一端の約束に依て、將來必らず源之助と夫婦となる事を覺悟してから、旦那を持つ樣な事もなく、末を樂しみに働らいて居たが、相手の源之助は斯の通り、之では兎ても行末の見込がない、永く恁樣關係を續けて行つたのでは詰らなく姐さん藝妓の顏を潰す、遂にきもせず、切れもされない破れ菅笠、寧そ一思ひに此方から振り棄てゝやるが可いと、仲間の老妓達が躍氣となつて、結局喜代次は源之助と綺麗に分袂る事となつた。

然しお互ひに愛嬌商賣の藝人同士、永く睚み合ふのも宜しくないから、此は一番彼の社會で云ふ「飲み分れ」と云ふ事にするが宜しいと、兩方の贔負連が仲に入つて、一夜兩人分れの盃を酌み交す事となつた。

此時源之助方では、永い間女を釣つて置いて結局之を棄てる、と云ふのであるから、幾何か金を出さう、國と國とが戰爭をして、人の命を殺り合つてさへ、結局は償金で媾和が出來る世の中、俳優と藝妓との情事が、金で落着を附けるに不思議はないと云つた、然し喜代次は承知しない。

之が買つたり買はれたりした間ではなし、今更金などを貰ふ要もない、然し妾は夙く紀伊國

屋の親方と夫婦約束をして、終に此の年齒になつて了つた、今更殘念至極である。此で切れるなら萬望妾しの年齒を返して貰ひ度い、以前の若さに戻して貰ひたい。喜代次の主張は斯うである。

出來ない相談ではあらうが、女の言分として無理もない、之は如何扱つたら可いかと、口を利いた最負の連中も、果と行詰つて了つた時、有繋に紀伊國屋の親方、巧い事を言ひ出した。

『成程、至當の言分の樣だが、そいつあ不可ねえ、年齒を老つたのは何も先樣ばかりじやねえ、私だつて同一事た、對手で返して呉れなら、此方も返して貰はなくつちやア』

此奴は夫に違えねえ、同じ事は一つ事だ、喜代次さんには氣の毒だが、年齡ばかりは雙方恨みつこなしに、一つ宛老るに極つてるのだから、と云ふ事になり、喜代次も强て頑張る譯にも行かず、果は互に笑つて清く「飲み分れ」をした、此顚末は當時中央新聞の記者をして居た土肥春曙が

『積戀雪別路』

と大層時代な標題を附けて、一週間許り新聞に續き物にして書いた事がある。

此話を聞いた魚河岸の旦那連の尾虎の主人、其人は松島屋と雁次郎の好い處を取つて磨き上た樣な好い男、親の代から成田屋最負で、逐々身代を傾けたと云はれる位の人であつたが、喜代次が十何年の苦節と、お冠りに熟々感心して、それから間もなく旦那になつた、喜代次も身の納り處を得た譯である。

（二七）天下の糸平に好い息子

――夜具の袖に惨い調伏

「天下の糸平」と云へば、懦夫をして尚起たしむる程の、我が實業界の大元勲、其息子の平八さんは、世間によくある親の名を辱しむる様な馬鹿息子ではない、機略もあり才識もある立派な實業家、加之に堂々たる風采で、何時でも番頭附で歩き廻る姿は、何う見ても昔しの旦那衆である、お鯉は立派な好い男と云へば、今でも田中平八さんを想ひ起す、一中節と義太夫が好で、能くお座敷で語つて聞かせる。

小文の眞似をして、口を曲げる様に氣取つて居るおなか、榮龍、お鯉などの連中、田中の旦那のお座敷と云ふと、喜んで飛んで行く、誰でも大好な人であつたが、内心中原の牡鹿を射落すべく鏃を磨いて居た女武者もあつた。

平八さんには、新橋に相思の人があつた、其妓を落籍して木挽町に家を持たせ、金子と云ふ

本姓の名札を出さした、而して家に居る間も、始終藝妓の風をさせて置いたとは、田中さんも亦變り者である。

然るに縁は異なもの、烏森は春本の義太夫藝妓で餘り上等でないのが、一度三味線を彈かして好な義太夫を語つた處からであらう、田中さん此太棹の絲に引掛つて了つた。

喜樂の女將が驚愕いて

『大變な事が出來たんだよ、田中の旦那と夜具の袖とがネ……』

此藝妓の口許が、夜具の袖に似て居ると云ふ處から、此名がある、蓼喰ふ虫も好々と濟まして居られない岡燒連、無上に口惜しがつた、何とかして調伏してやらねば、と云ふ相談を始めたのが、聞えたか知れたか、夫からは田中さん些も一同を呼ばなくなつて了つた。

一同で口惜がつたが仕方がない、田中の平八さん出先から自家へも歸らず、喜樂の女將の計いで、夜具の袖の爪彈きで、好い心地にさわりの一節も唸つて御座る、愈々只では置けないとあつて、その奥の四疊半の靜寂を破るべく、岡燒連中一同で押掛け、何と云ふ理由もなく、只無茶苦茶に田中さんを押へ附けた。

田中さんは吃驚り敗亡、夜具の袖は瞻を消して泣き出す躁ぎ、其弱り様と云つたら無かつた、之で好い氣持になつて、一同大勝利を叫んで引上げた近頃の大手柄、愉快々々と喜んで居ると大間違ひ、之が却つて二人の間を煽つた譯になつて、夜具の袖は直ぐ落籍されて家を持たせられる、之では何とも手の附けやうがない飛んだ藪蛇である。

木挽町の金子さん、此噂さを聞て魂を顚倒返らせ、根が思ひ合た間であるだけ、忽ち大ヒスとなつて、毎日深川の不動様へ日參に行く、日參處ではない、一日に二度も三度も行くので、少し變だねと云ふ評判が立つ、抛擲ても置けないとあつて、銀之助氏が仲に入り、金子と夜具の袖とを姉妹にして此處に一段落が附いた。

（二八）三共の御大若氣の過失

——横濱から花月へ日參の事

現時では三共の御大、實業界一方の雄鎭として押しも押されもせぬ立派な位地に納まつて御座る鹽原又策氏、お若い時には大分面白い事があつた、それがお鯉の身の上に關係があるから、御迷惑か知らねど此に御紹介に及ぶ。

又策氏は十九の時、當時既に富豪であつた父上の取引關係である某外人に伴れられて、數年間海外の新空氣を吸ひ、天晴れのハイカラ青年實業家となつて歸朝した。

承はれば其父上は、元水道の撒水まで爲され、腐つた下駄も棄てた事なく、質素儉約、勤勉貯蓄に一心不亂であつた結果、相當の富豪になられたので、共に立志傳中の人である、其息子の又策さん、亦決して凡庸の器でない事は、今日の成功を見ても了解が出來る。

極く若い時海外に出たのであるから、歸朝して見ると、却つて日本のものに興味を感ずる、

凡そ新歸朝者の多くが、第一に美しいなと思ふのは、藝妓であるさうな。又策氏恰度二十三歳のハイカラ紳士、各所の宴會で多くの美しい藝妓を見て、成程「ゲーシヤ、ガール」の名が世界に轟いて居るのも無理ならぬ次第と感心した、其美しい多くの藝妓の中、一番又策氏のお氣に召したのが、お鯉であつたさうな。お鯉が十八歳の時である。

それからと云ふものは、横濱住居の又策氏、毎日必らず正午近くの汽車で新橋に着く、驛から直ぐ車を花月に向けて、此で晝飯を喰べる、而して其席には必ずお鯉を呼ぶ。

御飯が濟むと、午後二時の汽車で横濱へお歸りになる、此間二時間のお勤め、毎日判で押した樣に決つて了つた。

其二時間の間、何んな話しがあるかと云ふと、一向取り止めた事もない、無論、粹な話しや色つぽい話題の取り替はされる筈もない、お互ひに遠慮のある子供同士が、お茶屋の二階で御辨當を喰べる程度を、一歩も出ないのだから罪がない。

感心に眞面目な人、然し可怪な方よ、位にしかお鯉は考へなかつた、夫より以上、別段何か氣も附く樣な事は一度もなかつたのである、之が百日も續いたのだから驚く。

すると、或日の事、養父の倉太夫は突然お鯉に向つて、お前は鹽原又策さんと云ふ方を知つて居るか、と尋ねた。

無論知つて居る、此間中から毎日晝間花月から掛るお座敷は、その鹽原さんの名指で、毎日お午飯のお給仕に行てる次第である、が然し、養父が此お客の名を知て居るのは奇怪い、何故そんな事を訊くのかと、お鯉は反問した。

すると倉太夫の曰く。

『實は昨日も、其方が來て、お前を是非嫁に貰ひ度い、引き取つて學校に入れて、三四年修業をさせてから、改めて結婚したいと、至極眞面目なお話しであるのだ、こんな結構な事はない、俺は大變嬉しい事と思ふ、左樣いふ樣にして頂いたら、娘も喜ぶ事と存じますと、お賴みをして置いたが、如何だね』

まあ吃驚した、偖は左樣いふ肚であつての事か、いま養父の談に、昨日もとある處から見ても、今までに既に幾度か訪ねて來て居るに違ひない、何かそれに就ての交渉があつて、夫が大體纏つての上で、斯ういふ事になつたに違ひない、然しあの生眞面目な、卯の毛の尖端ほども、

そんな素振を見せなかつた鹽原さんが、そんな氣で自分を毎日呼んで居たのか、と、お鯉は少からず案外の思ひをした。

然し公然と養父に交渉を始める迄には、自分の事に就て十分調べたり考へたりしたに違ひない、第一あの毎日の晝間のお座敷で、横から縱から自分の態度や人物を觀察して居たのであらう、誠に恥かしい事だ、そんな事とは露知らず、普通のお客と考へて、平氣で振舞つて居た自分が、如何にも氣まりが悪い、穴があれば入り度い位に思ふが、偖、今更致し方もない、お鯉は面喰つた。

倉太夫としては滿足な事であらう、豫てお鯉を藝妓にして、その上で立派に嫁に遣り度いと云ふのが、彼の志望であつた、それが今鹽原さんのお蔭で、全く實現されやうと云ふのである、全く嬉しいに違ひなからう。

然しお鯉の肚の奥底には、直ちに養父の意見に隨ふ事の出來ぬ或るものがあつた。お鯉は、痛烈なる悔恨と、煩悶と、徹底した諦めの念とを懷かざるを得なかつた、鹽原氏に對してゞはない、自分自らの身上と、境遇とに就てゞある。

養家の事情の上から、恁して藝妓にはなつたものゝ、お鯉は別に女と云ふものゝ眞實を解して居る、女性は純潔なるものでなければ、良家の嫁となる資格の無きものであると信じて居る、決して藝妓を以て醜業を營むものと卑下する譯ではないが、此の社會の風習の上から、未だ一向に理智の眼の開かぬ前に、其女として一番大切なるものを蹂躙られて了ふ身は、再び元の素き色に返る事は出來ない、中には何事にも無關心で、平氣で新生涯に入る女もある、然し自分には夫は出來ない、今日の世の中、男にはまだ純潔を望む事は出來ぬであらうが、女は左樣は行かぬ。

其取返しの附かぬ事が分つた時には、限りなき悔恨と、純なるものへの憧憬に、血の涙を絞らさせられる、誠に痛ましい限りではあるが、是れも亦人の運命、眞に致し方がない、此に於てか煩悶があり懊惱がある、泣ても叫んでも既う追附かない。

あの鹽原さんの樣に、生眞面目な若者、藝妓の何物なるかを知らず、只少しく教育が足りない位に考へて、いまから十分教育して將來一家の主婦にしやう、などと考へて居る心が、氣の毒でもあるが悼ましくもある、自分ば到底其れに應ずる資格のなきもの、もう迚も駄目、之は

自分の入り込むべき境地ではないと、肚を定めた。乃で何となく只

『それでは考へて見ましやうね』

と養父に答へた、餘りに乘氣になつて居る人に、突如り不承知を唱へて絶望させる勇氣はなかつた、何故不承知かと聞かれた時、其理由として擧げねばならぬ事は、此養父に對して餘りに痛ましい事であるし、又、娘が親の前で口から出すべき言葉でない。

『考へて見ましやう』とは、何う考へるのだか、考へた後は何と返事をして呉れるのだか、倉太夫には分らなかつた、明瞭り斷つた譯ではないが、養女が平生の氣質から、此の樣子では餘り脈が無さゝうだと、倉さん少からず悄氣たが、さりとて强て說得する元氣もなく、其時は只夫なりに濟んで了つた、倉太夫の心中何の位落膽した事だか、察せられる。

此緣談は之で終つたが、後年お鯉が鹽原さんに會つた時、面白い應酬をした話しがある、之はずつと後のお譚。

（二九）洗ひ髮のお妻が詫證文

―澤村宗十郎の凄い手腕

さて是から、此お鯉の話しの最初の頂點である、市村羽左衛門との結婚の顚末、羽左衛門と池田謙三氏夫人の祕密關係から、お鯉が市村の家から離緣になる面白い經緯に入る。

市村羽左衛門は當時尙家橘と名乘つて、中洲の眞砂座に出て居たのである。梅幸の榮三郎、幸四郎の染五郎等と共に、當時若手俳優中の大人氣者、其藝風は當時の劇通連から固く將來を囑望されて居たのである。

其前々から音羽屋に出入りして居たお鯉は、芝居の初日と千秋樂とに必ず音羽屋の家へやつて來る家橘を知つて居た、然し其頃家橘は、例の洗ひ髮のおつまとの艶名高く、兩人は將來必ず夫婦になるものと、人も吾も皆共に信じ切て居たのである。

ところが、何うした事の間違ひであつたか、當時訥升と云つた現の澤村宗十郎が、盛んに其

怪腕を揮ふ盛りで、何時の間にかおつまと宜しくなり、誰も知らぬ者もない關係になつて了つた、其顚末は話しが餘り傍系へ外るから此には省略するが、其評判は當時却々高いものであつた。

當人同士の事は暫らく置く、納まらないのは家橘贔負の魚河岸、大根河岸の顏役達、人もあらうに同じ役者の訥升如きに、市村家橘の女房たるべき妓を奪られたとあつては沽券に關はる、家橘の顏が立たねえ、此奴は只事じや濟むとか濟まねえとか、散々大悶着があつた後、おつまからは謝罪證文を取つて此方は納つたが、偖家橘の嫁を決めなくつちやならぬと云ふ事に立到つた。

（三〇）團十郎の娘を斷はる意氣

——白羽の矢はお鯉に立つ

俳優は藝術家であるか、無いかは、其頃は未だ一向に論じられた譯でもないが、兎に角世間公共の物で、贔負々々が肩も入れる代りに何事にも口も出し、一身上の事にまで躍氣となつて騒ぎ廻る事は、現時より餘程猛烈であつた、羽左衛門の家橘が永い關係で、洗ひ髪のおつまを女房にしやうとした矢端に、斯道に掛けては無上に小手の速い澤村宗十郎が、横合からちよつかいを出して了つたので、家橘の贔負連は承知しない、此上は是が非でもおつま以上の女を家橘に添はせておつまや、宗十郎の顏を見返へさなくつては、と敦圉いた。

乃で羽左衛門の母親を初め、音羽屋、成田屋の家内達の間で、第一の候補者に擧げられたのは、成田屋の二番娘旭梅の扶伎子さんである、成程家柄と云ひ育ちと云ひ、恰度好い似合の夫婦、之なら至極善いだらうと、相談を進めて見ると、肝腎の羽左衛門が納まらない。

容色は餘り美くはないが、人間は聰明に出來て居て殊に教育もある。第一親父が日本一の團十郎、之に何不足のある筈がないと、世話人達が額に筋を出して詰め寄せると、羽左衛門の云ひ草は斯うだ。

『俺も俳優として一人立の出來る人間だ、それを將來成田屋のおかげで出世をしたと云はれては面白くない、是非其話は止めにして貰はう』

然し其言分にも道理はあり、其心意氣は買て遣らねばならぬ、此は市村の顏を立てさせたら、と云ふ事になつて、然らば次の候補者として、おつまに劣けない藝妓と云ふ註文で、目を注けられたのがお鯉であつた。

では早速交渉に取り掛れと、選ばれたのが魚河岸の旦那連の山庄の主人、山庄さんは直ぐにお鯉の養父の倉太夫を訪れて、其話しを申込んだ。

倉太夫は最初からお鯉を堅氣の女房にしたかつた、つい先頃鹽原又策さんから折角好い話しのあつたのを、何故か知らぬがお鯉は斷つて了つた、誠に殘念に思ひ何卒再び彼の樣な好い希望者が現はれて呉れゝばと、待ち構へて居る處であるから、市村からの緣談に應ずる氣にはな

れない、役者の女房に大切な娘を遣るなどとは、思ひも依らぬと云ふ見幕である。

『俺は若い頃からの道樂者、俳優の内幕や品行の事は、よく知つて居ます、ですから娘は藝妓こそさせては置きますが、俳優へだけは嫁り度くありません』

恁う斷乎りと謝絕られては、橋渡しの山庄さん、手も脚も出ない、まあ其内には親父の心地も變らうから、暫らく息を拔くさ、と云ふ事になつた。

然るに此に有力なる此の緣談の贊成者が現はれた、夫はお鯉の尤も仲の良い姉分の小文である、小文は前に述べた如く梅幸の女房になる約束がしてある、中途如何な故障が起つても、是が非でも梅幸の妻と云はれなければ承知がならぬと決心して居る、其の音羽屋の一門の羽左衛門から、自分が妹の樣に思ふお鯉を嫁にとの話しを聞いて、小文は自分の事のやうに喜んだ、聞けば倉さんは大反對、當人のお鯉はあやふやで、未だ海の品とも山の品とも決らぬとの事、之は一番力を入れて、此話しを眞實にしなければ、と思つた。

『ねえお鯉さん、家橘さんの許へ嫁くやうにしてネ、左樣すれば私達は、生涯親類同士で暮せるんだものネ』

お鯉の心は動いた、小文さんの言て吳れる事は眞實であらう、遮莫、藝妓である、俳優と藝妓の夫婦、それが相當なのであらう、あの人が成田屋の娘を貰はないと云ふ氣慨も、捨たものでは無い、自分が姉さんの樣に思つて居る小文さん程の藝妓でも、俳優の女房さんにならうと苦勞して居る、それが當り前なのであらう、お鯉は心の奥から、切りに夫が自分の運命であるかのやうに指し示された。

但し此處に矢嶋さんと云ふものがある、矢嶋さんは旦那である、之が何と云ふかよく質ねて見ねばならぬ。

（三一）藝妓の旦那は損な役廻り

——お鯉の父の突然の死

お鯉の世話をして居る矢嶋平造さんは、全く其頃の善い旦那であつた、自分の持物と定めて、外聞にもし慰樂にもして居た藝妓を、俳優から希望れて嫁に遣つて了ふ、と云ふのは、如何な好人物でも決して好い心地のする筈がない、然し當世の紳士として、若い藝妓の世話をして居る以上、早晩這樣問題の起つて來る事は知れて居る、好い加減馬鹿にされた揚句が、知らぬ間に持て行かれて、人中で後ろ指を差されるより、初めから公然に話しをされた方が我慢がし易い、彼是れ云た處が、今更始まらない、此はグッと寛恕けて、女の世話をして遣れば、粹な人だと、云はれる丈け得な位ね、此はきれいに手仕舞をすべき場合と、山平さん相場師だけに流石に思ひ切りが宜い。

實は山平さん、お鯉と羽左衛門の緣談を聞く前、鹽原又策から申込のあつた事も知つて居る、

一難拂へば又一難、前門に洋行歸りの若紳士を逐へば、後門に人氣俳優の一隊が押し寄せる、此奴ア又何のこつたと、山平さん得意の煙管廻し許りして居られなくなつて、偖、熟々と考へて見ると、云ふ迄もなく一方は富豪で一方は俳優である、自分も亦實業家の一人、同じ畠の若者に奪られたとあつては何も面白くないが、俳優に呉れて遣つたと思へば聊か諦めも附く、結局は至極の良緣でがなあらうと云ふ事になつて、飽くまで終局まで世話をしてやると明言した矢嶋平造さん、藝妓の旦那たるも亦辛いかなと云ひたい。

乃で山平さん愈々男を見せて、後の世まで粋な人、肚の大きな人と曰はれたい心願からか否か知らぬが、夫からは頻りに羽左衛門を引連れては諸々方々の花柳界を遊び歩く、まことに感心な心掛けの人である。

お鯉はもう羽左衛門の處へ嫁く事に決心した、旦那の矢嶋さんは、終局まで面倒を見てやるから、恥しくない丈の支度をして行け、と言て呉れる、周圍の者も皆左樣なる事に決めて、其事の發表される日を待つて居る、事此處に至つて不賛成を唱へる者は、只養父の倉太夫のみである、頑固な倉さんは、誰が何と云つても此事許りは同意しない、飽くまで娘を俳優の女房に

する事に反對して居る、之には全く弱つたが、偖、親の事ではあり、如何する事も出來ない。

仕方がない、時節の來るのを待つ許りと、皆なが云つて呉れる、然し其時節なるものは、如何な形式になつて、何日頃來るものだか、神ならぬ身の、何人にも分らなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

其時節は瞬く間に到來した、お鯉の爲めには、甚だ悲しい悼ましい形式で、來たのである。

それは養父の倉太夫が突然の死である。

其少し前から、倉太夫どうも身體の工合が惡い、大した事もないが、何しろ七十二の老人である、家の者や友達が集つて親切に看病する、醫師は病人が毎日の酒を禁めれば、まだ〳〵壽命はある、大丈夫だと受合ふ、然し此の倉さん、醫師が何と云つたつて自分から禁酒などをする人でない事は分つて居る、お鯉は養母のおはつと相談の上、醫師に賴んで酒の嫌ひになる藥と云ふのを調合して貰つて、倉太夫に飲ませた、倉さん夫と悟ると、染々と情けながつて云ふ。

『親孝行のお前にも似合はない事をして呉れるね、俺は何も彼も滿足で、七十二にまでなつた、もう思ひ置く事は何にもない、此上好な酒を禁めて迄、生き延びやうとは決して思はな

い、萬望孝行をして呉れるなら、終局まで飲み續けさして死なしてお呉れ、お願ひだからネ』

恁うまで言はれて、この前途の知れて居る養父に、大好なお酒を止めさせ様とは思へぬ、それで酒の嫌ひになる藥も止めて了つた。

一日、芝居の總見の席から、遽かに母の電話に呼ばれて、狼狽周章いて家へ歸つて見ると養父の倉太夫は病床から起き上つて

『ナニネ、少し許り怪訝い様だから、呼んで貰つたのさ』

と云ふ、自分で自分が少し怪訝いとは、全く奇怪い次第であると、お鯉は覺はず笑ひ出す處を、辛と堪へた。

（三二） 鰻の中串で末期の酒

——遺言狀は通夜の料理の事ばかり

病人の容態が少し變だ、と電話で呼び附けられて、大急ぎで驅け附けて見ると、病床の養父は蒲團の上へ起き上つて、自分から少し怪訝いと云ふ、氣は確乎ではあるが、虫が知らすか容子は何となく心許ない、之は甚麽したものだらうと、思ひ煩らつて居ると、病人再た口を開いて

『鰻が喰べたいなあ』

と云ふ、鰻は養父が大好物の品である、何でも喰べたい品を喰べさせて上げる事と、急いで好物の中串の蒲燒を註文する、軈てそれが來る。

『その鰻を下物に、熱燗で一杯飲らうか』

忽ちお酒のお燗が出來る。

『身體が自由にならないから、猪口は煩い、大きな品にして呉れ』

滿々と酌がせた熱燗の湯呑を、見事に一杯明け、二杯目を半分ほど殘して、蒲燒を半分ほどさも美味さうに喰べ終ると。

『蒲團の下に書附がある、その通りに賴むよ』

と言つた限り、後は左樣ならとも云はない、其儘であつた、偖も徹底した通人の最期であつた。

別に財産のある譯でなし、他の子供があるのでも無いから、遺言などの必要もあるまいが、お養父さん何を書き遺して置いたのかと、蒲團の下の書附を出して見ると、斯ういふ事が記してあつた。

墓石は伊皿子の石屋に出來上つて居る

子を生まぬのに、可愛い〻子を授けられて、その一人子に跡を葬つて貰ふ事の出來るのは何より嬉しい

お通夜の人には、酒を澤山に飲ませる事

今ある樽は、俺が半分位呑んで足りなくなつて居るから、新規に一樽買ふ事

料理の獻立は左の通りにする事

其料理の獻立は頗る精しい、汁物から、酢の物、煮つけまで、曰く何、曰く何と、詳細を極めたもの、流石に料理通の遺書だと首肯れる。

通夜の酒の事と、料理の獻立、それ許りを遺言狀に書いて、大切な養女の婚禮の事なぞに就ては、一言半句も及んで居ない、そこは全く大通人の爲され方、最後まで倉さんらしい處が難有いと、後で聞いた人が皆涙をこぼして感心した。

墓石まで賴んであつたとは知らなかつた、兎に角聞いて見やうと、人を賴んで調べて貰ふと、何時の間に賴んだのか、六尺許りの圓石の表面へ、南無阿彌陀佛と彫り附けたのが出來上つて居た、此字は延壽太夫が書を巧く書くので、前々から賴んで書いて貰つたのだと分つた。

總て遺言通り、殷賑かな通夜も濟して、四谷の全勝寺に埋葬した、法號は道譽專唱信士と云ふ。

鹽原又策氏がお通夜に來て呉れたのは、辱けない事とお鯉は思つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

俳優の處へ娘は遣らぬと、飽まで頑張つた養父は、此の如くにして亡くなつて了つた、如何に通人であつても、大切な娘の事ではあり、愈々と云ふ場合になれば、眞面目に顏を赧め合ふやうな事になるかも知れぬ、それも嬉しい事ではないと覺悟でもしたかの樣に、倉太夫はポツクリとお遑を告げた、死際まで淡白したものだと、知る者は皆感心した。

あとは皆悉く賛成である、子に甘い母親は、お鯉が好いと思ふ事に從ふ外、別に意見もなかつたのである。

山庄さんの顏も此に於てか立つ、斯くて談はずん〳〵と進んで行く。

市村の母親が、お鯉を見たいとの事である、世話人の山庄さんが迎ひに來た、お座敷が忙がしかつたのに、急に時間を遣り繰つて連れて行かれるので、お客の强られたお酒が醒め切らず、姑となるべき人の前で謹んで坐つて居ると、お酒の醉が出て來て苦しい。

お夏の結つた潰し島田に新藁を懸けた頭髪を、姑が褒めて呉れたのも、夢幻に聞いた。

（三三）婚禮の御料理三人前

――成田屋の家で婚禮の仕直し

姑入りも滯りなく濟んだ、羽左衛門の母親のお富も、異存はないと云ふ、乃で萬事がスラスラと解決して、お鯉は愈々羽左衛門の處へ嫁入と云ふ事になる。

媒酌人は最初からの肩入である魚海岸の山庄さん、式は當時羽左衛門が住んで居た京橋の材木町の家で行はれたので、お鯉は金春の家から、彌生の女將さんに連れられて出掛けた、其席には五代目菊五郎の代理として、家内のお里が列席した、是はお鯉が二十歳の年、春のころの事であつた。

俳優と藝妓との間に行はれても、婚禮は猶且り婚禮である、殊に市村とお鯉とは互に顏を知り合つて居た丈の間、嚴肅な式を擧ぐることになつた。

その當日愈々式後の御馳走と云ふ場合になつて、お鯉は素より山庄さんや彌生の女將などが

吃驚した椿事がある、それは是れ丈の人の前にお料理が僅た三人前であつたこと。

何かの間違かと思へば、左様でもない、羽左衛門の母親は慥かに三人前しか誂へなかつたのである、是は亦如何した事と、皆なが呆れて了つた。

元來羽左衛門の婚禮萬端は、音羽屋の家で爲すべき筈であつたが間ぎはになつて知らぬ顏で相談にのらないので、羽左の母親のお富と云ふのは元來がお人よしで、何事にも確乎した考慮の無かつたのみか、成田屋の妹娘を羽左に貰ふ計畫に贊成して居たのであるから、お鯉を迎へるに就て、支度萬端何事も踏切つた事が出來ず、菊五郎名代として其席へ列した妻女の顏色を伺ひ〳〵、つい斯した裏店式の婚禮を擧げやうとしたのである。地下の太閤秀吉も定めし後世畏るべし位の事を云つて居たであらう。

斯くと見て取つた彌生の女將は大立腹である、人氣役者と新橋の一流藝妓の婚禮に、三人前の料理とは何事だ、餘りと云へば人を馬鹿にして居る、萬事は私しが心得て居るから、と、急に人を走らして料理を增やさせる、一同はやつと喰物に有り附いた譯、あまりに滑稽な不思議な一幕、近松物か、沙翁劇か、否々、寧ろ曾我廼家に持て行くべきものかも知れない。

肚の出來て居る彌生の女將は、此の夜お鯉の耳許に囁いて

『今夜の事はお前さん善く覺えて居るんだよ』

と云つた、お鯉は未だ事の眞相は善く分らなかつたが、此事を聞いて忽ち四邊の暗くなるのを覺えた、そして何とも云ふ事の出來ない不吉な豫感が、狹い胸の中に充溢になつた。

滑稽な婚禮が有つたと云ふ事が、倏忽ち彼の社會の評判になつた、事あれかしと祈つて居る連中、是れ丈の椿事を觸れ散らさずには置かない、迅くも此事を聞き知つた市川團十郎、自分の娘との經緯から、羽左衛門とお鯉が、前代未聞の婚禮を行つたと云ふのを氣の毒に思つて、數日後改めて築地の自分の家で婚禮の仕直しをして呉れた。

成田屋の事であるから、一切を神式にして大掛りな立派なものであつた、が、一度で濟ますべき婚禮を、仕直すなどとは延喜でもないと、お鯉は人には言はぬが、心の中で面白からず思つた。

（三四）市村家橘の嫁御寮

――御嶽の行者が珠數の折檻

お鯉は斯して市村羽左衛門の女房になつた、家庭の人となつては、最早お鯉さんでは不可ない、本名のお照に還つた、市村錄太郎、同人妻照子、誠に美しい一對の夫婦雛である。

傍目にも羨ましかるべき新婚の夫婦、何れ劣らぬ賣出しの藝人同士であるから、其生活も華麗であるべく、其當座、夢も亦綺羅びやかなものであつたらうと想ふと、大違ひ、まこと錦繡の裏表、其内部は頗る慘憺たるものであつた。

市村の家は梨園に於ける名家の一つである、もと淺草の猿若町に三芝居があつた頃には、一丁目は中村座、二丁目は市村座、三丁目は河原崎座と決つて居た、そして中村座は中村明石、市村座は市村羽左衛門が座主であつたのである。

劇場の表の正面に梵天立つた櫓を上げ、名題役者の旗幟を立てた、其華麗な櫓に借金が附い

て居た。

劇場の櫓の借金、其負債は最負筋に依て分擔されて居るので、大して嚴しいものでは無かつたが、百兩の當に編笠一枚の義理を見せて、芝居の興行される毎に、給金の中から幾分づつ入れる事になつて居た、俳優の給金は、昔時から家内にも知らさぬと云はれて居るが、當時市村が中洲から取つて居た給金は大枚八十圓であつた、其内の一分は天引として櫓の借金の中へ引かれる、市村家の財政の狀態は之で大體が分る。

お鯉は市村家の妻女として、此身代を繰り廻して行かなければならなかつた。

彼女が昨日までの生活狀態に比べれば、却々以て樂な事ではなかつた。

内には姑、外には音羽家一家、成田家一門、之がまた大なる舅姑であつた。

其外、最負、友達、諸藝人、人出入の烈しい朝な夕な、兎角世間に事あれかしの連中には、家橘の女房が今何をして居た、市村の妻さんが斯う云つた、と、ラヂオ裸足の大袈裟の宣傳、一犬嘘を傳へて萬犬之に和するなどは朝飯前、箸が横に轉んだ事さへ、御注進、御注進の囂け附け、なかなか五月蠅い事であつた。

お鯉のお照、此中に在つては髪も滿足に結ふ事も控へた、何日でも結び髪にして手拭を姐さん冠り、襷は夜寢る時まで脱さない位にして居た。

芝居の閉場から何所かへ廻つて、夜更けて歸る良人を迎へて、後の始末やら翌日の準備をして、床に入るは何時、碌に夢も結ばぬ中、夙くも姑の、拂塵の音の響に脅かされる、そして寢所から襷をかけて飛び出す。

その毎日の忙がしい働きも、男の心が我が胸にあり、情けと愛とが互に緊く結ばれて居る限りは、朝夕の苦勞も何厭はう、堪へて忍んで末の樂しみを待たうと誓ふのも誠の女心である。

お鯉は身を粉に碎いても、此の辛い勤めを切り拔けて行かうと決心した。

姑のお富は、音羽屋のお銀さんと同じく、御嶽山の信者である、時々御嶽の行者が來て、お座と云ふのが立ち、おがみを上るのである、お鯉には何の事だか更に分らぬが、兎に角神樣を拜む事であるから、善い事に違ひないと思つて、一所に席の隅の方に坐つて、拜みを上げた。

先代から權威の利いた嘉助爺やと云ふのがあつた、之が亦熱心な御嶽信者で、市村の家で御座の立つ時には、嘉助爺やが中座と云ふを勤めるのである。

某日の事、例の行者が來て、家内一同神前に畏み畏んで列んだ、白衣の行者が何事か譯も分らない文句を言つて居たが、軈て夫れが終る時に、持つて居た珠數を揮つて、ハツシと許りお鯉の胸の邊りを打つた、不意に打たれたのでお鯉は吃驚したが、それは只珠數で打たれたと云ふ丈の驚きであつた、が何ぞ圖らん、それには更に驚くべき或ものがあつたのである。

（三五）水垢離斷食の苦行

――良人に代る健氣の覺悟

御嶽教の御座の席で、お鯉が行者から珠數で打たれた翌日、羽左衛門は今日から三七日の間、斷食をして水垢離を取るのだと云ふ。

それは昔時からよくある、藝道修業の爲めか、と聞くと、左樣ではないと云ふ、それでは如何いふ譯、何か仔細のありさうな事と、重ねて訊いても、羽左衛門は默つて居て、何とも答へぬ。お鯉は不思議に思つた。

愈々羽左衛門の斷食に水垢離が始まつた、一日、二日、平生の彼の人物に似氣なく、眞面目に勤めて居る、お鯉は之を見て居るに忍びない、之が親の爲めとか、藝道精進の爲めとか云ふなら、また是非ない事であらう、然し其爲めでないと云て、眞實の事を明して呉れぬのは、何か他に自分に明かし兼ねる魂膽があつての事ではあるまいか、之は如何しても聞き質さなくて

は措かぬと覺悟した。

さて何の心願あつての斷食と水垢離、女房たる私に、其理由の云へぬ筈はありませぬ、若し其理由の云へぬ程の事なら、大切な身體に害のある事、只た今から止めにして下さい、止める事が出來ぬとなら、何卒其譯を聞かして下さい、と、お鯉は決心の色を面に漲らして、羽左衛門に詰め寄つた。

羽左衛門も之には全く弱つた、その本當の仔細を語れば、お鯉の驚きと失望は如何ばかりか、貰つた許りの可愛い女房に、何してそんな事が明されやう、然し一方は御嶽の神樣のお告と、母親の指圖である、女房が諫めるからとて、之を止める譯にも行かぬ、「はて、孝ならんと欲せば……」とか何とか、舞臺の上なら大芝居を見せる處だが、眞劍の女房を前に置ては、其處を巧く切り拔ける事が出來なくなつた。

餘りに執拗くお鯉が責め立てるので、羽左衛門は逐々兜を脫いで、ぽつり〳〵と實を明した。

『そら二三日前、御嶽さんの行者さんが、お前を珠數で打つたらう、それは行者が打つたのでは無い、神樣が打つたのだ、神樣のお怒りを受けたのだ、何の爲めのお怒り、それは、親の

思つてる事に背いたからのお怒りなのさ、俺は知らないよ、俺がしたのでは無いが、さうなんだつさ、それで其のお怒りを解のには、斷食をして、水垢離をとれば、それでいゝんだとよ、だから俺はやつてるのだ、案じる事は無い、それ丈の事さ』

良人は「それ丈の事さ」と云ふ、却々何して、それ縣命の思ひで、聞き得た事は之である、良人は何事もない氣に話すが、爭へないもの、其言葉尻は怪しく顫へて居る丈の事ではない、當人は何事もない氣に話すが、爭へないもの、其言葉尻は怪しく顫へて居るではないか、之を聞かされたお鯉の心は如何であらう、身體中の血が一時に逆に流れるかと思つた。

成程、それで分つた、御嶽の神様はいざ、姑のお富に自分が氣に入らぬのである、羽左衛門の嫁には成田屋の娘をと願つても居り、賴み廻つても居た念願が頓と外れて、自分と云ふ女が乘込んで來たのが、姑の氣に入らぬは無理もない事、其思ひの逆しる處、終に行者の珠數となつて、自分の胸を打つたのである、其の飛沫が良人の斷食と水垢離とは氣の毒千萬、此處は如何でも自分が犧牲とならねばならぬと、お鯉は健氣にも決心した。

御嶽様のお告が何うの斯うの、神様の思召が善いの惡いの、と云ふ事は、此場合論じて居らるべきでない、何事も皆己れの不束から、身を棄てゝこそ浮む瀨もあれと、お鯉は良人に代つて斷食と水垢離を爲すべく願ひ出た。

『何卒それを私にさせて下さい、家に居る者は何んな事でも出來ます、芝居と云ふ職業を有つて、しかも最も元氣でなければならぬ貴方が、斷食や水垢離などを、どうして出來ませう、どうか私に』

依情地た姑は容易にお鯉の云ふ事を聞いて吳れない。

『どうも成る事はありませんよ、神様は、しろと仰有つた事をする者には、決して間違ひなどをさして下さりません』

頑として聽入れぬ姑の言葉に、お鯉は胸も裂ける許り辛かつたが、何でも彼でも此願ひ許りはお聽濟を、と無理に强請んで、やつとの事で其翌日から、羽左衛門に代つて斷食と水垢離をする事になつた。

さて良人の代りに自分が之を勤める事となつて見ると、辛い事も何にもない、傍で見て居てハラ〳〵して居た昨日の切なさに比べて、今日は遙かに樂な、難有い事と思つた。

（三六）横濱の宿に悲しい想ひ出

――松助の部屋から油を借る

音羽屋の一門が、横濱の興行に行つた事がある、俳優一座の中、八十餘歳にして今尚鑊鑠たる松助、死んだ蟹十郎親子、羽左衛門の若夫婦の三組の爲めに割り當てられた旅館、旅館と云ふよりは、其時分尚ランプを點けて居たのでも分る怪しげな安宿であつた。

師走興行でゝもあつたらうか、晝からの雪は、夜に入つて益々劇しく降り頻る、芝居は疾うに閉場て、松助も、蟹十郎も宿に歸つて來た、夜は深々と更けて行くが、お鯉の羽左衛門は歸らぬ、炭火は埋められた、良人の着物を炬燵に掛けて、暖め始めてからはや幾時。

雪の夜の旅の宿である、心細さもまた一層、定めし獨り寂しく待つて居る事であらう、成るべく速く切り上げて歸つてやらう、などと云ふ料簡の起る羽左衛門ではない、それにしても餘りの遲さ、既う何時になるだらう、と思つても、時計は良人の持て行つた外にはない、其内何

所かで打つボン〳〵時計が二つ聞える、埋けた火も漸く微かになるが、炭取りの炭も今は殘り少なになつた、洋燈の油ももう盡きたのか、ヂー〳〵と音を立てゝ今にも消えなんとする心細さ。

火の無いのも困るが、それは寒い丈の事であるから、辛抱のならぬ事もない、洋燈が消えて了つては如何にもならぬ、歸る人を待つのに、暗闇では致し方がない、貧弱な宿屋の、帳場も女中ももう疾に寢て了つた、仕方がない、誰か仲間の處から貰ふより外はない。

軋む廊下の足音を忍びながら、松助の部屋へ行つて、油を少々下さいな、と言つて見たが、老人グツスリ寢込んで、返事がない、強て起すも氣の毒の次第と、今度は蟹十郎の部屋へ行つた、此處は蟹十郎が娘と二人居る部屋で、遠慮も薄く、譯を話して洋燈の油を少々分けて貰つた。

『市村の旦那は、まだ歸らないのですか』

蟹十郎は怪訝な顏をして訊く、何と返事をして可いか分らないので

『ゑゝ……いゝゑ……』

何方とも附かぬ薄ら返事に胡魔化して、やつと逃出して歸つて來た、これではまた重ねて炭を貰ひに行く勇氣も出ない。

其内火は全く盡つて了つた、外面の雪は風を交へて、ハタ〳〵と窓を打つ、幾度か襟を搔き合せても、寒氣は背後から水を掛けられる樣に襲ふて來る、然しまだ若い身の、それも辛棒の出來ぬ事はない、然し炬燵に掛けた着代の衣服が、冷え切て了つたにはハタと當惑した。

よしそれが如何なる座敷からでも、寒夜に更けて歸る良人に、冷たい寢衣を着せる譯に行かぬ、何の爲の留守をして居ると叱られても、一言の申し開きもない、こりや如何したら宜からうかと、案じ煩らうた揚句、お鯉は自分の衣服をすつぽりと脱ぎ棄て、火の無い炬燵に掛けてあつた良人の寢衣を、自分の身體に着込んだ、そして其上に己れの脱ぎ棄てた衣服を羽織つて、自分の身内の溫かさで暖めやうとしたのである、火の無い炬燵は今は用もない、往來の一筋道を見渡す小窓を明けて、降り込む雪も何のそのと、雪道を眺め〳〵良人の歸りを待つたのである。

羽左衛門は三時近くになつて、やつと歸つて來た、隱す事もならず、有の儘を話して、火の

ない始末を詫び、己れの身で溫めた衣服を脱いで着せかける、昔時の親孝行〳〵の話しにも似た良人への心盡し、柔しい一言でも聞かされゝば、只つた今までの寒さ辛さなどは、倏忽に忘れて寧そ嬉しい想出の一つと考へる、優しい女心である。

深夜に石油貰ひの一條、松助や蟹十郎等に依て、五代目菊五郎の耳に入つた、家橘夫婦に一寸來いと雪の朝、事あり氣に音羽屋の前に呼び出されて、何の事かと跪坐る。

音羽屋は大立腹である、旅に來て、まだ慣れもしない女房を、二時、三時まで、置きざりにして夜遊びをして歩くとは如何した譯、石油を貰ひ歩いて歸りを待つ女房の身にもなつて見るが好いや、と大叱責。

いやはや羽左衛門散々である。之で謝罪つて了つて、以來氣を附けろ、位で幕が引ければ、好かつたものを、例の羽左衛門お調子に乘つて

『油だけなら好かつたが、炭が無くなつたもんだから、俺の着物を暖める事が出來なくなつて、お照の奴一世一代の智慧を揮つて、自分の着物の下に着込んで居たなざア、少し滑稽でしたなア』

五代目の御機嫌を取り結ぶ心算か何かで、迂濶り酒辯つた羽左衛門、聞いて居た音羽屋の目には涙が光つた。

『馬鹿ッ、……己はな、此の歳になるが、それ程の事を女にして貰つた事はない、一生忘れるな、お照には己が今日御馳走してやらう』

『ほい、失敗つた、叱責の種を自分で蒔いたのか』

暢氣に笑つた羽左衛門も、決して情け知らぬ人ではない、何んなにか、深い滿足を覺えたに違ひない。

（三七）憐れ伊東家小文

―寢覺や如何に尾上梅幸

後の雁が先になつて、お鯉は圖らず羽左衛門の女房になつたが、前々からの約束でもあり、世間の評判も高くなつて居る小文と梅幸との間は、未だ確實と纏らぬ、イナ、小文が梅幸を思ふ情は、日と共に增し月と共に烈しくなつて行くが、梅幸の方では旣う夙に小文に秋風を立たせて、頻りに逃げ廻つて居る、小文は容易にそれと心づかぬらしい、お鯉は思ひ切つて、其旨を小文に通じてやらうと思ふが、外の事と違ひ、どうも明白に言ひ出す術がなかつた、出來る事なら梅幸の心が再び小文に返つて、共に親類交際の出來る間になりたいものと祈つて居た。

何卒して小文さんに、繁々梅幸と會はせる機會を多く造へてやりたいと、お鯉は羽左衛門の處へ嫁入してから、音羽屋の家で、芝居の稽古のある事が、よく分るので、羽左衛門が出て行くと、直ぐに小文の處へ內通してやる、すると小文は音羽屋へ飛んで行く、行けば厭でも應で

も、梅幸に逢ふ事が出來る譯である。

すると如何であらう、小文の姿が見えると、梅幸は直ぐに、何とか彼とか文句を造へて、音羽屋の家を飛出して了ふのである。

斯んな事が幾度か續いて、小文は全く梅幸の心變りを知つた、十七の時から此の歳まで、隨分長い年月、一端の約束を信にして、梅幸の爲めに何の位苦勞をして來たか、それを今更何と云ふ事であらう、小文の悲しさ、悔しさは尋常でない、事是に到つて、自分は如何したら好いのだらう、と迷つた。

旦那であつた加東德三さんも、梅幸の事を承知で、色々と心配をして呉れた、然し加東さんは兜町の人で、烈しい浮き沈みがある、今は大分具合が悪くなつて、花柳の巷に現はれて來ない、從つて小文との關係も何時しか切れて、現今は池田謙三さんになつて居る、池田さんも亦分つた人で、小文と梅幸との經緯を十分に知つて御座る、小文を梅幸の處へ嫁に遣らねば、自分の顏も立たない樣に思つて居る、夫が爲に金なぞは幾干要つても關はないとまで言て呉れる。小文も此事ばかりは難有いと思つた、然し當の對手の梅幸が此の態では如何する事も出來

ない、海は覆へすべし、山は倒すべし、一度び去つた男の心は、再び取返へす事は出來ぬ。

小文ほどの女でも——あれだけの藝妓でも、終に梅幸の情を永く繼ぐ事が出來なかつた。

永い歳月、張り詰めた心が急に弛んだ爲か、小文はそれからぶら〳〵と病ひ出した、池田さんが造へて呉れた山城河岸の、今の江木寫眞店の地尻の處に在つた家に引籠つた限り、家の外へは一歩も出ぬ、何んな止むを得ないお座敷でも、固く斷つて行かない、梅幸との破綻が知れては、外聞なくて、人に面を見られるのも厭、と云ふのである。

然し小文も女である、生粹の江戸ッ兒である、よし此上は將來の事は云はぬ、假令ひ三日でも良いから、梅幸の處へ嫁に行かなければ、承知が出來ぬと云ふ氣になつた、これが小文の最後の希願であつた。

現今を距る二十五年前の、名妓の意氣地は恁樣ものであつた、而してそれを聞く誰でもが、これは最も至極であると、首肯したものだ。

其頃家根屋の彌吉、古河吉などと云ふ顏役の上に達つ石定大親分、五代目菊五郎と共に、小文が大の贔屓であつた、何れも梅幸の心事が分らぬと憤慨する、五代目の如きは

『小文は俺が好だ、小文のやうな清楚した藝妓は、ざらにあるもんで無い、榮三郎の奴、奇怪な奴だなア』

と云つた、之は五代目のお世辭でも何でもない。

小文が病ついてからも、一途に梅幸を思ひつめて居ると聞いて石定親分は

『よしッ、俺が引受けた』

度胸もあるが、智慧才覺もある石定親分、小文の願望を叶へてやると引受けたに就ては、十分目算があつての事に違ひない、それが外れゝば今度は小文許りでなく、石定自身の顏にも關する次第、乃で四方八方に交渉を附け、肝腎の梅幸には否と云はせぬ仕掛を持て行つて、どうだと抑へ附けに掛つたが……あゝ、落花再び梢に返らず。

（三八） 小文を棄て柳橋に仇花

―石定親分の男泣き

女には泣かれ、贔負には怒られ、朋友には罵られ、親父にまで嘲笑はれてまで、梅幸が小文との約束を實行する事を欲しないで、頻りに逃を張つて居るには、亦無理もない仔細がある、梅幸はもう此の時には、別に他に意中の女が出來て居たのである、それは別の人でもない、現今の夫人である柳橋の榮家の藝妓君子で、もう其時は既に家まで持たせてあつたのである。

既に斯いふ人が居たのである。親の威光でも如何とも致し方がない、音羽屋一家は男衆に至るまで、梅幸さんの女房さんには小文さんが來るものと信じ切て居ても、何の甲斐もない。

惡い役を買つて出たのは、石定親分であつた、從來大抵の葛藤は、石定が口を利けば治まるに決つて居る、自分も何にか纏め得るものと信ずればこそ、『俺が引受けた』と云ひ切つたのである、可憐しい小文が涙を流しての賴みを聞いては、假にも男と生れた以上、諾と引受けるの

は當然である、然し男と女との關係は、他の出入とは大分違ふ、腕づくでは解決の附くものでも無い。

『俺は此の年になる迄、男と女の問題が、斯んな面倒な事とは知らなかつた、野暮な役廻りを引受けたものだ』

口數の極く尠ない親分だつたが、此始末ばかりには石定も全然閉口て、覺えず愚痴を漏して居た。

小文はどつと病の床に臥して居る、容體は日毎に面白くない、梅幸の方の交渉は全く駄目だ、お諦めなさいとは、人間の皮を被つて如何して言て行かれやう、鬼をも恐れぬ石定も、斯うなつては小文に合せる顔がない、全く以て弱つて了つた。

『石定の親分は未だ來ないの、あの話しは如何なつたらうねえ』

周圍に居る者も、之には困つた、何とも返事をする譯に行かぬ、其間に小文の病症は益々進んで行く。

お鯉は姉とも思ふ友達の、輕からぬ病氣と、戀を失つた悶々の胸中とを思ふて、眞に身も世

もあられぬ心地がした、朝な夕な、友達の枕頭に坐つて看病もしてやりたし、慰めてもやりたしと思つても、今は嫁と云ふ身の上、姑の手前もあり自分の思ふ樣には行かぬ、儘にならぬ事を心から情けなく感じた。

此の二三日、小文は水も通らなくなつた。たゞお照さんを呼んで呉れ、是非會ひたいから、と言ひ續けて居ります、誠にお氣の毒樣ですけれども、一寸お照さんをお貸し下さい、と云ふ使者が市村の處へ來た。

飛ぶやうな思ひで、山城河岸の小文の家へ驅け附けて見て、お鯉は吃驚した、あの美しかつた人が、今は見る影もなく痩せ衰へ、疲勞の烈しい爲に床に就いても居られないので、只茫然と父親の膝に抱かれて居るのである。

威勢の好い鳶頭の父親は、涙聲を振り絞つて

『しつかりしろ、死んじやないぞ、死んじやあ駄目だ、しつかりしろ』

と言ひ續けて居る、傍には母親が正體もなく涙に搔き暮れて居るばかり、何とも言ひ樣がない、お鯉は思はず

『何うして、斯様に重くしたんです』

隨分無理な質問である、此の場合になると、誰の云ふ事も、無理許りである、小文の父親はお鯉を見て、百萬人の味方を得た如くに喜んだ、然しもう以前の元氣もない。

『どうにも、斯うにも、醫者の奴、洗滌とやらを二度もして、腹へ氷を當て續けたら、斯んなに弱つて了つたんでさア、手當をしい〳〵惡くするなんて、何の爲の醫師か、譯が分りやしない……おてるさん、何うしやう、何うしやう』

此の狀態を見て、お鯉は突嗟に思案を定めなければならなかつた、これ程の病人を恁樣處に置いては仕方がない、如何にかして病院へ入れて、十分の手當をするより仕方がないと思つた。

名妓小ふみが死の際に家寶の衣裳を抱へて馳けつけた五代目菊五郎氏（御所の五郎藏）

（三九）橋本國手が悲しい宣告

――親切極まる池田謙三氏

お鯉は考へて、小文を抱いて居る父親に言つた。

『お父ツあん、これでは不可ませんね、萬一の事でもあつたら、諦めが附きません、病院へ入れましやう、赤十字病院には橋本先生も、ベルツ博士も居らつしやる、そして出來る丈の事をして、そして、そして……』

『お照さん、賴む、賴む、どうぞ、左樣して呉れ』

父親は最うから意氣地が無い、精も根も全く盡き果てたのである、意識の有りや無しやさへ不明瞭であつた小文は、顏を擧げて、微かに目を開いて、嬉しげにお鯉を見ながら

『お照さん有り難うよ、病院へ行きたいわねえ、やつてお呉れな』

日も傾く頃、お鯉は二人挽の車で――其頃はまだ自動車は無かつた――山城河岸から本所の

緑町へ走つた。

その行先は、曾て赤十字病院の副院長であり、お鯉の幼い時からの掛り附けであつた木脇良先生の處である、夜中不意に驚かした木脇先生を、何でも彼でもと必死に動かして、山城河岸に連れ戻つたのは夜も更け渡る頃であつた。

木脇先生の診斷も、同じく容易ならぬ重態との事である、乃で橋本國手の許へ電話を掛けて、無理に入院の許可を得て、其手續きまで滯りなくして呉れた木脇先生、それでは斯様々々して、明朝早く赤十字へ連れて行けと云ひ置いて歸つて行かれる、眞に地獄で佛様を拜む様な氣がした。

小文の好な番茶の冷したのが、咽喉を濕す位に通る外には、何にもはいらぬ病人を、泣き崩る兩親と共に見詰めながら、一刻千秋の思ひの中に夜が明け離れた。

寢た儘で行かれると云ふ條件で、今ほど完全な病人用寢臺車の無い時代、まるで葬式の様に馬車の中へ乘せて、小文を赤十字病院へ連れていつた。

お鯉も斯うなつたら、飽まで世話をせねばならぬ、使を市村の處へ出して譯を話し、一所に

赤十字へついて行つた。

此で頼む處は橋本先生の御診察である、萬望、好い御見立てをと祈つた事は、情けなや水の泡、診察の結果は

『お氣の毒だが、あと二三日でしやう』

小文の兩親が、第一に落膽した姿の憐れさ。

『お照さん、頼むよ、頼むよ』

兩人は病室の次の室に坐り込んで、ぼんやり考へ込んで居る、もう言ふべき言葉も盡き果てたのであらう。

寢臺の前には、獨逸語で書いた長い文句の札が垂下げられた、肺結核と云ふのであるさうな。

病人の傍に附き添ふ者として、お鯉はベルツ博士の診察を受けて、種々傳染病に對する豫防法心得を言ひ聞かされた。

小文の旦那の池田謙三氏も、早速病院に見舞に來られた、『どうか出來る丈の事をして遣つて呉れ、必ず心殘りの無いやうに手當をして』と、親切な言葉で、頼むといつた。

小文さんが赤十字へ入院した、と云ふ事が傳はつたので、新橋界隈の人々は多勢見舞に來た、最負のお客や知合の人々の見舞も、却々に多かつたが、病氣が病氣なので、此方から遠慮して直接に會はせず、何れも次の室で兩親に挨拶して歸つて行つた。

橋本先生は、二三日までの壽命と、診斷されたが、病人の小文は斯いふ立派な病院に入つて、豪い先生方に診て頂いたので、之なら必ず全癒るものと安心し始めた、同時に聊か元氣も回復して、スープなども少々づつ飲ける樣になり、早く少しでも快くなりたいなどと語り始めた。

然し駄目なものは、何としても駄目なのである、事既に是に至つては、如何なる耄婆扁雀と雖ども、起死回生の術を施こす事は出來ない。

此に一つ小文の爲に、大切の事がある、それは例の梅幸との關係である。

（四〇） 散り行く名花一輪

——瀕死の小文が最後の望み

江戸ッ兒は思ひ切が好と云ふ、小文の父親の鳶頭も、初めは是が非でも娘を殺したくない、死んで呉れるな、生きて居て呉れと、傍目も恥ぢず喚いたものであつたが、漸く沈着て考へて見ると、既う仕方がない、斯な立派な病院に入つて、名ある先生方に手當をして頂いて、夫でも不良とあれば全く壽命の無いのだ、どうも致し方がない、此上は切て死に行く娘に、心殘りの無い樣にして遣りたい、何か最後の望みがあるだらう、自分達の力で出來る限り、どうかそれを叶へて遣りたい、年齒の行かない時から藝妓勤めをして、今では兩親まで樂に過さして呉れるが、隨分辛い厭な思ひもしたらう、此方は遂に親らしい行ひをした事もない、之が最後の分れだと云ふから、切て願ひの一つも叶へて遣りたい、と、泌々とお鯉に云ふ、お鯉も貰ひ泣をしながら聞いた。

『だからねお照さん、お前さんには何でのだから、何卒聞て遺つて下さい、あの子の遺言を……』

正當な親心である、お鯉も一つ聞きたい事があってそれも下へ、

『ゑゝ、屹度聞いて上げるから、待てゝ頂戴ね』

他に談し對手もない、寂しい賴りない病の床にある身に只々懷かしいのは、心を許しあつた友達である、小文は今は片時もお鯉を傍から離し度くなかつた、一寸でも室の外へ出れば、直に六ケしい事を云ふ、傍に居さへすれば機嫌が好い、而して種々と心の中に思つて居る事を話す、最う直に治くなる心算だから、云ふ事は自と其先の事に及ぶ。

『ねえ、お照さん、濟まなかつたわえ、退院が出來るやうになつたら、私は肺病なんだから、茅ケ崎か大磯へ行かうよ、そして私が家橘さんに賴んで、お照さんを借りるから、一所に行て頂戴ね、全快祝ひには何を配らうかしら、有り來りの品は厭だから、何か考へて置いて頂戴』

如何して遺言が訊かれやう。

病室を出ると、餘命幾干も無い娘が、最後の希望が何であるかを、早く知り度がつて居る兩親は、右左からお鯉に取り附く。

『何と云ひました』

『何か言ひましたか』

實に辛いとは此事である。兩親の心中は全く無理もない、若し徒らに躊躇して居る間に、萬一の事でもあれば、それこそ取り返しの附かぬ失敗、生涯の恨事である、今は心を鬼にして、何にでもして小文から聞かねばならぬ、乃で氣分の好い潮先を見計つて、言ひ出した。

『ね、病氣は氣持が一番大切だと、橋本先生も言て居られたわ、何でも思ふ事を言たり、爲たい事をしたり、逢たい人には逢つて、話したい事を話したりすると、飲むお藥の驗も見えて、早く全癒る樣になるのですつて、ね、それに違ひないわね』

火蓋は存外容易く切られた。

凝ッとお鯉の顏を見詰めながら、聞いて居た小文の眼には、涙が溢れた。

『でも、旦那に濟まないわねえ』

了解つた、これだ、お鯉の胸には、直に響くものがある。

『それは心配ないわ、橋本先生の仰有つたのを、池田の旦那も聞いてをられて、何でも思ふ様にさして、早く治して遣て呉れ、と仰有つたのだから構はない事よ』

『さうなの』

微かに左様云たまゝ、嬉しさうに、安心したらしく微笑んだ病人は、其儘また無言つて了つた。お鯉は質いて見た。

『どうしたの』

『晩まで考へて見るわ』

之を早く言ふ様に責めたら、或は自分の容態の旦夕に迫つて居るのを、悟られやしないかと云ふ心遣いもある、先づ自身から言ひ出すのを待つより外はない、お鯉は只管に無事に、時の經過のを祈つた。

夕方になつて、小文は果して其眞實の祈願なるものを言ひ出した。

（四一） 有繋は五代目菊五郎

――文晁の繪の衣裳を土産

小文が最後の希望は、果して何であるか。

『お照さん、晝間左様言たから、思ひ切て色々の人に逢て見たいと思ふのよ、河岸の山庄さんは既う來て？、家橋さんも來たの、さう……それから、あの、新富町の榮さんに來て貰つて、好いだらうか知ら……』

矢張り左様であつた、左様であらうとは想ふては居たが、近頃自分と云ふものを振り棄て顧みぬ梅幸に對して、小文の心中或は萬斛の憤恨を抱いて居るかも知れぬ、若し左様した心から、今更此期になつて、逢ふのも嫌と思つて居る處へ、迂濶り氣を利かし過ぎて梅幸に來て貰ひ、それが萬一變な破目になつたら、却つて病氣にも障らう、幸ひ梅幸が直ぐ來て呉れても、果して病人の喜ぶ様な事を言つて呉るれか何か分らぬ、など豫てあゝ斯うと心配して居たのであつ

たが、小文の心は猶且り左様いふものであつたか。彼女も猶且り女である。
然し自分に無情い人を、死の際まで思ひ續けて變らないその心事を考へると、他人の事ながら胸が痛くなる、もう斯なつては、何しても最後の希望を遂げさせて遣るより外はない、お鯉は獨り左様決心した。
病室を驅け出ると、背後から兩親が追ひ縋る。
『やつぱり榮さんに逢ひたいのです、逢ひたいのですよ』
泣いじやくりつゝ斯う言ひ棄てゝ電話室へと急いだお鯉は、直ぐ魚河岸の山庄に電話を掛けて、兄さん是非小文さんの希望を遂げさせて、と賴んだ。山庄さんは一議に及ばず承知した。
『よし〳〵、俺が榮三郎の首へ繩を附けても、引張つて行くよ』
音羽屋の家へ電話を掛けて、五代目を電話口に呼び出す、菊五郎はお鯉の話しを聞くと、電話の前で飛び上つて驚いた様子。
『ナニッ、小文が、愈々いけないか、そして榮三郎に、あゝ左様か、よしッ、俺が先に直ぐ行く』

五代目菊五郎は時を移さず飛んで來た、持つて來たお土産が振つて居る、それは御所の五郎藏の衣裳である。
小文は前々から、音羽屋が五郎藏の狂言に着る衣裳が大好きであつた、それは昔し谷文晁が書いた墨畫の富士掛ケ龍の模様の附いたもので音羽屋の寶物の一つである、小文は其の衣裳が氣に入つて、遊びに行く度びに五代目に賴んで見せて貰つた、有繋頭腦の細かい音羽屋は、小文が危篤と聞いて、美人の最後を喜ばせるべく此寶物を持參したのである。
五郎藏の衣裳を左手に抱えた菊五郎は、小文の病室へ入ると、直ぐ
『おい、小文、なんだなあ——
治るよ、全癒るよ、顏色も好いじやないか、即刻に榮も來るぜ、緊乎して全快るんだ、そして一同で何所かへ遊びに行かうぜ、お前が好きな五郎藏の衣裳を見舞に持つて來てやつた、そらよ』
ふわりと、件の衣裳を小文の毛布の上から、被せ掛ける。
病んで横はれる人はまことに一代の名妓、絶世の美貌に加ふるに粹と俠とを以て聞え、洛陽

三千の佳麗をして顏色なからしめた妓、之を慰むる人は卽ち當代の名優、其意氣と至藝とを以て前に此人なく後また此人なからんと歎賞される優、間に横はるものは近代の巨匠文晁の筆に殘る芙蓉峰頭雲龍躍る圖を描ける梨園の至寶、其景、其情、眞に凄艶の極み、之を一幅の好畵圖と云はうか、一場の悲壯劇と評さうか、形容する適當の文字も見當らぬ。

心は異れど、思ひは同じである、一同が待ちに待ち焦れる榮三郎は未だ來ない。

首に繩を結けてもと固く約束した魚河岸の山庄の兄さんは、八方に電話をかけてやつと其居所を突き止めた、が、凝として其の來るのが待て居られぬ、乃で榮三郎同道の役を家橘に賴んで、自分は一時も速く小文を見たいと、病院へ馳せ附けた。

山庄さんも難有いが、まだ少々物足らぬ、肝腎の榮さんは如何したのかと、一同首を傾ける。

『何しやあがつたんだな、あの馬鹿野郎、何をして居やあがるんだな。兄貴、も一度電話をかけろよ』

菊五郎は、刻々に迫る小文の容態を見て、頻りに氣を焦慮せ、山庄の親方に、電話々々と迫る。

（四二） 小文梅幸最後の握手

——此恨み綿々として盡きず

小文は今の先きまで意識は明瞭であつたが、如何したものか、だん〳〵と耳が少し遠くなつて來た、周圍の人の話しが、能く聞えなくなつた、お鯉との談話も、顏を傍へ持つて行かなければ、よく判らない樣であつた、然し自分の病氣の性質を知つて居るので、他人に萬一の迷惑を掛ける事を恐れて居たのは、一層いぢらしく見えた。

『もつと其方へ寄つてお話しよ、傳染ると不可ないからね』

そーッと自分で搔卷を引寄せ、鼻の上まで他人に息の掛らない樣に力めて、お鯉を情けながらしたが、今は其力も無くなつた。どうか、意識の分明して居る內に、榮さんが間に合つて吳れゝば可いが、と、並み居る一同首を延して待つて居る。

軈て、急ぎ近づく人の跫音、家橘に連れられた梅幸が、周章と小文の病室に入つて來た。

五代目は梅幸の顔を見ると、突如り

『早く、早く、……手でも握つて遣れ』

何故か、見るから蒼白く、それは凄い程眞蒼になつて、戰慄へて居た梅幸は、もぢ〳〵しながら其右の手を出した、小文は看護婦に助けられながら、力なく其糸の如くに細く羸れた手を出した、二個の掌は久し振に合つたのである。

滿座の人、皆涙なしに此光景を見る事が出來なかつた、中には聲を擧げて泣いた者もある、お鯉の胸は張り裂ける樣、千萬無量の思ひが身體中に湧き返へる。

小文は嬉しかつたであらう、最後の願望が叶つて、定めし滿足であつたらう、然し其心の底の底には、言ひ知れぬ恨みの躊躇るものが無かつたであらうか、此人は更と早くに來て呉れる筈の人であるのに、と、今になつて辛と連れて來られた男の無情を、口惜しく思ふ心がなかつたであらうか、やきもき思ふ傍の人の心には全く無關心で、小文は其手を持たれた儘、たゞ梅幸の顏を穴も明けよと見詰めた儘、一語も發しない、透き通る樣な涙を、ポロ〳〵と滾した、梅幸も亦無言つて居て、一言も出さなかつた、何も云はなかつたのではない、言へなかつたの

であらう。

お鯉は考へれば考へる程、悔しくて〳〵堪らぬ、小文さんを遂々這樣姿にした、其胸先へ獅嚙み附いて遣りたい程に突き詰めたが、偖、音羽屋始め大勢居る處で、劇しい事も云へぬ、此時小文が心を籠めて握つた手の感じが、生涯此無情男の手に殘つて、忘れる事も出來ぬ樣にと祈つた。

思ひに思つた最後の祈願の達せられて、もう此世に思ひ遺す事のなくなつた爲か、小文は見て居る中に梅幸の手を持つたまゝ容態が變つて來た。

『ソレッ』と云て、大勢の醫師、看護婦が驅け附け、何本かの注射も試みたが、彼女の美しい眼は再び開かなかつた。絶代の名花は終に廣尾の原に散り果てゝ了つた、悲しい事である。

十七の時、梅幸の榮三郎と夫婦約束をしてから、晴れて添ふ日を待つ事十年、樂しみにした日は終に來ず、空しく失戀と憤恨の間に、悶々の情を抱いた儘、一代の名妓小文は此世を去つたのである、享年二十有六、淺草今戸の瑞泉寺、俗に赤門の寺と云ふ境域に

春松院本譽妙光大姉